

らないのだから、この氣は常に清淨無垢しやうじやうむくな空の氣と同じ自由さをもつて融通無碍に活らいて、然もその活らきの上に相ひ引くミか相ひ斥けるミかいふ執著的な因縁を残さないから、従つて、その業行を封じて了ふミいふやうな殻を作る惧れが無いここになるのである。だから、その行ひが常に善行であるにも拘らず、内心に善行を誇る氣も應報の褒賞を待つ氣も無いので、自然に過去の事に執著せぬほが朗らかさをもつて伸びのびミ未來に向つて精進するここが出来るのである。だからして、この氣はまた、死後の追善供養を待たずに成佛したるミいふここになるのである。これが、生死一如の解脱の氣そのものであるミいふここになるのである。即ち、生死が一如だから、だから死後の靈魂が生前の氣と同じ自由さをもつて、他の力を待たずに融通無碍に無から空へミ歸入して行くのである。だが、此の氣にもまた生死を貫いて活らく一脈の因縁の繼がりがあつて、それが、無の

世界に留めた業行ミ空の世界に上昇した業因ミの間を繼いで、さうした清淨さをもつた氣のみの層を作つて異同引斥の活らきを超えた和合相を現じて存續するここになるのである。これが十界に於ける四聖の總稱である極樂に外ならないのである。だから極樂からの轉生ミいふ事は救世くせ・教化の爲め以外には無いここになるのである。

斯うした事情によつて、地獄・極樂の別が生ずるのだから、地獄は生死を貫いて活らく執著心によつて作られ、極樂は生死に互つて無碍な精進心によつて作られるミいふここになるのである。だから、善に執著する者も惡に執著する者も、共にその執著心ゆゑに地獄に墮ちて行くに反して、善惡に拘らずその執著心を修行の功德に依つて清淨無垢な精進心に轉じ得た者は、皆な等しく極樂に往生し得るここになるのである。この意味に於て、惡人が成佛して善人が成佛しないミい

ふこころが嚴密して存在するこころになるのである。だから、善人だから修行の要は無いなご、いふほど淺果かな事は無いのである。

悪人はその生活に對して夢さら悔悟の心を持たぬにしても、内心では何時か年貢の納め時が来るだらうといふ悔悟への氣だけは持つて居るから、その氣が素直に活らく時にあひさへすれば臆ては成佛し得るに反して、善人はその生活に對して誇らないまでも、善事を積む事が無上の行ひだと思ひ込んで、愈よ善への執著を強めるから、その氣に禍されて無執著心を得て成佛するこころが甚だ至難なものになるのである。だから、自分免許の善人ほど始末におへないものは無いのである。だからして、死後は「燒穀の種の如し」いふものになつて、殆んご永劫化された中有に迷ふやうなこころになるのである。だが、さうした燒穀の如き種の上にも、何時かはまた辟支佛びやくしぶつの加護が現はれて、獨覺成佛どくかくじやうぶつの時が與へられるこころになるから、それで御佛の慈悲は宇宙に遍滿して餘すこころが無いといふこころになるのである。事實、宇宙生命の活らきといふものには、一分の隙も無駄も無いのである。だから、その活らきの根本義を捉へた佛教が、無上甚深微妙むじやうじんじんみゆうの法門であるこころは勿論でなければならぬのである。

この甚深微妙な佛法によつて、無限多な宿業が一の錯謬さくみやうなしに輪廻し轉生して居るのである。だから、燒穀の種のやうな宿業すら尙ほ成佛の時にあへるこころになるのである。

さて、成佛後の宿業であるが、これは例へば雜穀の種が夫れぐに整理されて蓄はへられて居るやうに、異同引斥の活らきによつて夫れぐの系統による層をなして一つの落ち著きを得るこころは前述の通りであるが、さて、さうした無から空に互る落ち著きを得るこころになるこころ、それと同時に、今度は不斷に生者から放

たれて居る現業の氣きいふものを、その現業げんごうと殆んたいてい同一な傾向をもつるやうな因縁を結んだ業因層の綱目に感じて、そこで轉生の氣を得るきいふことことになるのである。

そこで、この現業げんごうと宿業しゆくごうとの轉生的交感作用であるが、これがまた夫れそれの業因傾向によつて定まる現・宿兩業間に於ける異同辨別の引斥作用によつて交感しあふことことになるのである。だから、祖先の個別的宿業が子孫の現業に招かれて流星のやうに宿業層から抜けて轉生して來るのかかいへば、それは殆んたいていさうでは無いのである。

凡そ轉生の常態じょうたいいふものは、無・空の兩界に互つて種々の辨別層をもつて自他の別なく分散して居る宿業なるものが、その生前の因縁による個人的業因の氣を一脈の糸いととして種々層に分散したもの、間を継ぎ合せて居るから、さうした糸

の繼ついでがりが個人の影を湛たへながら無數に重なり合ふことことになるのだが、さうするすることその重なりの上にまた、生前の因縁いんごんは異ふ一つひとつの同氣相和の因縁が生じて、それが何人分かの同一傾向の宿業のみを集めて獨立的な活らきを持つやうになるなること、そこへそれそれと同一傾向の現業の氣が交感して來るくることことになるのである。だから、この轉生過程てんせいこていいふものは、肉體の遺傳に於て祖先の何人分かの或る特徴のみが一人の上に集約されて出生するののと同じ遺傳過程をもつることことになるのである。さうして、個人的特徴をそのまま、繼承するついでことこといふ事は、肉體のそれそれと同じで滅多には無いことことになるのである。ことこといふのは現・宿兩業の業ごうとしての立場からすれば、その直系ちけいことことの間には相當の繼ついでがりがあることことになるけれど、生死の別をも自他の別をも超えて活らく空の氣きとしての業因の立場からすれば、直系ちけいななことこと、いふ業行的關係を超えて活らく異同辨別の引斥力の方が主になつて來るか

ら、それでさうした様相を現ずることになるのである。より本質的な力の方がたくりよく選擇力として活らくのだから、それで業行的には何人分かのものが業因的に統一づけられて出生することになるのである。が然し、若し現業の方の力が單純な片寄りを有つて居た場合には、その力に相應した宿業層の小部分が交感して、半人分ミか四半人分ミかいふ業行のみが轉生の縁を得て出生する、また中庸を得て複雑して居れば多數の業層から集約して出生するミいふことにもなるのである。だからして、宿業の轉生ミいふものは、一人分のそれがそのまま、轉生するミいふことは殆んごあり得ないことになつて居るのである。が、こゝに、たつた一つさうした場合があり得るのである。それは、現生の煩惱的執著心が強よ過ぎる爲めに死んでも死に切れないミいふその力によつて、死後の因縁過程をミる前に直ぐに現業ミの交感作用を起して轉生の縁を結び、數日ならずして胎生するミいふ變相を

現ずるのである。これは、おもに悪人傾向のものであつて、その一代ではその業因に對する業行が足りないから、それで前業因の連續ミいふ意味の轉生が現象づけられることになるのである。だから、これには、死後の世界に於ける宿業ミしての轉生過程ミいふものは存在しないのである。ミいふのは、一度因縁が結ばれて出生した業因ミいふものには、自から定まる量的な業行ミいふものがあるから、それで、その業因による業行が一定量に達しなければ死な、ミいふ因縁を有つて居るのである。だから、一生で足りなければ二生にも三生にも互るミいふ變相をミることになるのである。が、常態ミしては、一生を限りミするので、人の壽命ミいふものは出生の因縁が結ばれた時に、その業因ミ業行ミの關係によつて決定されることになつて居るものなのである。だから、若くて死ぬも老いて死ぬもまた因縁であるミいふことになるのである。が然し、この因縁による天壽を

完うする人が何人あるかといへば、これが意外にも甚だ少ないのである。少ないが生死の現實であるといふことになつて居るのである。こいふのは、修行以前の生活こいふものが例外なく煩悩的であるところから、前生に於ける善悪不離の所業の記憶こいふものが今生に於ける煩悩的日常生活に呼びかけられて忽然こして生きて來るこいふことになるから、それで修行の伴はぬ生活は煩悩の爲めに天壽を完うせぬが常態であるこいふことになる譯なのである。出生時の因縁からすれば既に定められた壽命であるにも拘らず、出生後の煩悩生活によつて夫れが縮められるこいふことになるのである。こ同時に、發心し修行して行く功德によつて定命を延ばし得るこいふことにもなるのである。煩悩を轉じて菩提こするこいふ生活の執著無なき朗らかさが、自から定命の彼方へ導いて呉れる導師こなるのである。

斯のやうに、定命を完うし得るこ得ざるこは、か、つて修行の有無にあるこいふことになるのである。だからして、萬人はこ、に思ひを潜めて等しく生死解脱の菩提道を成ぜねばならぬこいふことになるのである。萬人は、夫れ自身の生死の因縁を明らめるこころから出發して、聽ては「因縁を離れて諸法を看ず」こいふ萬法一如の佛法の本義を明らめるこころを本願こせねばならぬこいふことになるのである。

さて、これで、宿業こその轉生過程この實相が明かになつた譯であるが、これが即ち十二緣起に於ける「無明」の實相そのもの、無常態であるこ同時に、不滅な靈魂そのもの、行方の實相でもあるこいふことになるのである。

だから、萬人の生活は今世のみで始終するものではないこ佛説されて居るのである。

即ち、釋尊は、無明と業との因果關係を、「法集經」に於て次のやうに説いて居られる。

「摩訶陀國の王、佛に問ひ奉りて曰く、世尊、一切の衆生は何に因りて業を造るや。佛、王に告げ給はく、王よ、一切の衆生は、我見に因りて顛倒の分別をなす。顛倒の分別は惑なり。惑へるが故に業を造り、業を造るが故に解脱するこゝ能はざるなり。」

國王、又問ひ奉りて曰く、世尊、我見は何に因りて起るや。佛、王に答へ給はく、王よ、我見は無明を根本とすなり。

王、更に問ふ、世尊、無明は何にを根本とすや。佛、王に答へ答はく、王よ、無明は理に違へる作意を根本とすなり。王、更に問ふ、世尊、理に違へる作意は何にを根本とすや。佛王に答へ給はく、王よ、理に違へる作意は不平等心を

根本とすなり。

王、更に問ふ、世尊、不平等心は何んぞや。佛、王に答へ給はく、王よ、不平等心とは、無始以來實の如く知らざるを不平等心といふなり。

王、更に問ふ、世尊、無始以來實の如く知らざるは何んぞや。佛、王に答へ給はく、王よ、無始以來實の如く知らざるは、無きものを有りて計する等なり。若し一切の法に於て、煩惱を離れ我見を離るゝを得ば、即ち平等心を得眞實語を得るなり。」

四 生命進化の理法・十二緣起

釋尊は、人生苦から解脱しようとして出家された。さうして、終に菩提樹下に於て、諸行無常・一切皆苦・諸法無我の法を十二緣起觀によつて正覺されたので

ある。だから、此の十二縁起の法は、佛教の根本義でもあれば、宇宙・人生の根本義でもあるといふことになる。即ち是れが、宇宙間に於ける一切の生命物象の進化的存在の法であるといふことになるのである。

こいふのは、此の法は、菩提樹下に於ける釋尊の丹田たんでんに忽然と印された、即ち明鏡に物象の如相にようさうが寫されるやうに、宇宙間に於ける一切生命の進化の理法が十二に分支ぶんしされて寫つて來たものであつて、決して、認識にんしきから論理への過程を経て構成こうせいされた哲學としての理論のみで解さるべきものでは無い。釋尊の智慧のみで作りに出されたものでは無い。だから、此の法は、釋尊以前の人にも以後の人にても、菩提樹下に於ける釋尊のやうな修行を遂げさへすれば、その丹田へ自然に寫つて來るこゝになつて居る常住不變ぢやうちゆうふへんの眞如法しんによぼうそのものである。太陽が昇つて沈み、人間が生れて死ぬこいふ、此の事實の法は理論ではなく常住不變の法そのものである。

のである。

さうして、此の「法」こいふこゝは、宇宙間に於ける一切の物象の在り方、動き方の「方」こいふこゝに外ならない。だから、此の十二縁起の法は、生命的な物象の在り方、動き方が、十二に分支されて寫つたのだから、その寫つたまゝの事を言葉に假托して説かれたものに外ならないといふこゝになるのである。

それから、「縁起」こいふこゝであるが、これは、生命的な物象の在り方、動き方こいふものが、皆な等しく、因縁いんえんによつて果があり、果縁くわえんによつて因がありこいふやうに、無常・永遠に轉じて行くこゝになつて居るから、夫れで其の縁によつて起る轉じ方の法を、佛教では「縁起」こいふ言葉で呼ぶこゝになつて居るのである。だから、此の「縁起」こいふこゝは、「進化の理法」であるこいふこゝになるのである。時が來たから種を蒔いた、蒔いたから生えた、生えたか

ら育てた、育てたから實つたといふ自然過程にしても、言ふことをきかないから打つた、打つたから膨れた、膨れたから病める、病めるから薬をつけた、つけたから治つたといふ人爲過程にしても、是れを因果的に見れば、その部分的な一つの場合が、皆な等しく因であると同時に果であり、果であると同時に因であり、因果一如であると同時に因縁果一如であつて、夫れぞれの場合に因を發展させる縁が無ければ果へ轉化しないといふ運びを取るのが、これが進化の常態であり縁起の實相であるといふ譯なのである。

時が來たといふ縁があつて種を蒔くといふ因があり、蒔いたといふ因があつて天地人の力といふ縁が活らき、聽て實るといふ果へ轉化して、夫れがまた蒔かれる時といふ縁を待つ種、即ち因となるのである。だから、此の事實に基づき、進化の理法としての縁起觀が、認識から論理化された抽象概念だを一途に定めて了

ふことは出來ないのである。事實縁起觀は、理論のみで左右するここの出來ない、事實に即した宇宙的發展の法そのものに外ならないのである。修行といふ經驗の裏づけがなければ證得されない眞如法そのものなのである。

にも拘らず、縁起の法は、念想觀上に於ける論理的關係を顯はしたものであつて、時間的因果關係を顯はしたもので無いと説く學説が、近來相當の權威を示して居る。相依的な事實の認識から抽象した理論的な觀念の仕方であるとい説いて居る。さうして、在來の托胎的因果關係を説くものとしての縁起説を一蹴して居る。十二縁起の系列を胎生學的な生死輪廻の過程だとい説く小乗教の説は全く牽強附會の妄説である、諸種の佛教原典に照して説破して居る。

成るほご、大乘的な立場から純理論的に解釋すれば、此の十二縁起の法は、無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死等の一々が因果の關係

として順序だてられて居る有爲法では無く、これは、全く理論的な相依の關係として甲は乙により乙は甲によるこいふ相互支持の關係によつて排列されて居るものであるこいふ、無爲法として説くこいふも出来るには相違ないが、この十二縁起は、有・無・空を一如の活らきこして居る現實に即した法に外ならないのだから、有爲法とするのは誤りで無爲法とするのが正しいこいふやうな偏見で定めつけられる筈のものでは無いのである。即ち、有爲法であるこ同時に無爲法であるこいふ空觀眞如の法そのものに外ならないのである。見方によつては、何ういふ意味にでも見られるこいふ生きた法が十二縁起なのである。宇宙間の一切の物象に遍滿して活らく生命力の活らき方を形の在り方によつて見た法が十二縁起なのだから、有爲法に於ける形を外にして無爲法に於ける力のみが正しいこは云へないのである。だから、十二縁起の法は、八正道の修行を圓成した禪定中に於て丹

田に印されてからでなければ、これを眞如の法として信受奉行するこは出来な
 いこいはれて居るのである。

さて、禪定裡に於ける十二縁起の如相であるが、これは勿論、無爲法による觀念の仕方としての順觀と逆觀とが楯の両面として意味づけられるこいふやうな抽象概念として印されて來るのではなく、嚴密して動かない順序を有つた法として印されて來るのである。

先づ最初に印されて來るのが「無明」である。

無明の實相は、前項に於て概述したが、今また綜合つけて言へば、無の氣に納められた業種に空の氣が含まれて、それが活現の縁を待つ業因として鎮まつて居る相が、これが即ち無明であるこいふこいふことになるのである。無に含まれた空が明として妙活しないから、それで無明こいふのである。

陽の氣を湛^たへた千曲川に陰の氣を湛^たへた犀川が落合ふ所に「音無し^なの里」に
 いふ所がある。陰陽の氣がびたり合致するに、その瞬間兩氣の活らきがぼつこ鎮
 まつて、そこに音無しといふ因の形式をこつた無明境を現じて、さうして聽て活
 らきかけて來る縁を待つことになる。宇宙生命の陽の氣に人類生命の陰の氣が
 びたり合致した所が、これが即ち無明である。だから「無明は佛陀の正法に對
 する無知といふことである」^レと言ひきつて了へるものではないのである。それは
 たゞ、論理的にはさうもいへるこいふまでのものである。

そこで、無明といふは、善・惡の業行^{ごふぎやう}が業種^{ごふぎやう}といふ種子の形に化した状態であ
 るこいふことになる。さうして斯ういふ變化を與へるところが、それが無の世界
 であるこいふことになるのである。だから、無の世界は、空の氣に有の氣がび
 たり合致して鎮まつた世界、即ち音無しの世界なのである。陰陽が合致して和合水

こなる彼岸の水でなければ名劍^{なけん}は鍛^{きた}へられないこいふ特殊の活らきを湛^たへて、寂^{じやく}
 爾^にして鎮まつた相^{すがた}である。だから、佛教の修行に於ける、「大死^{だいし}一番再活現成^{いちばんさいかくげんじやう}」
 といふことは、身心一如の活らきを出生以前の無の世界まで返して來なければ成
 就されないのである。單なる觀念過程上の事では無いのである。

この特殊な活らきを湛^たへたところに、無の世界、即ち無明界の本義があるので
 ある。さうして、この世界で人類の進化傾向が決定されるのだから、それで、十
 二縁起の無明が過去世の無始の煩惱を鎮めおほせた如相^{によう}として、その最初に位
 するここになつて居るのである。絶対に動かぬ位置をその最初に据ゑて居るので
 ある。だから、無明は、宇宙生命發展の原始態であると同時に、さうした事實を
 如實に會得^{えとく}する觀念的發展の原理であるこいふここになるのである。にも拘らず、
 十二縁起を單に相依的な智識發展の論理關係を説くものであるとする學者は、「釋

尊によつて闡ひらかれた涅槃ねはんの妙智に對する無智むちといふことが無明であつて、夫れ以外の解釋は誤りである」こいふのである。智識的には勿論さうもいへるには相違ないが、さう定めて他を誤りだこするのには、それこそ大きな誤りである。釋尊の教へは、勿論、臍下丹田に印されたこころの實證・實悟の教へであつて、決して智的解釋だけで盡される教へでは無いのである。修行によつて、一々體得して行かなければならない、實踐の教理であつて、決して、修行を外にした智識のみで會得される教理では無いのである。

次に「行」であるが、これは「無明に緣りて諸行有り」こ説かれて居る通り、無明こいふ相をこつて鎮まつて居た業種が、こで現世業の有の氣を受けて、こつと動き出すこいふ變相を現するのである。物の種が陽春の氣を受けてこつと發芽の氣を動かすやうになる相を現するのである。だから、行は「去世の煩惱によ

つて作つた善惡の業行が轉生てんじやうの位を定められる相である」こ説かれて居るのである。即ち、音無しの相が音の方へ動く氣を受けた相であるこいふのである。こころが、これを論理的にいふと、「行」は一切の物が成り立つここであるこ同時に、成り立たすここでもあれば、成り立つて居る状態の總稱のここでもある」こいふのである。こいふのは行の實相こいふものが、物こして成り立つ動きの本源を定める相であるから、それで論理的にはさうもいへるこいふまでのここである。決して、是れ以外の意味に解しては可こけないこ定め得るものではないのである。何故かこいへば、無明の業種が轉生の氣を受けて業因こして成り立つ位を定められる相が行の實相だからである。

次に「識」であるが、これは「行に緣りて識あり」こ説かれて居る通り、轉生の氣を受けて成り立つた業因が、こで現世業の有の氣に引かれて、母胎裡に一

定の業性としての受胎の氣を作る變相を現するのである。何ういふ地味の處には、何ういふ種類の物が適應繁殖するこいふやうに、相互に引き合ふ業の氣が選擇的に定まつて活らく相なのである。だから、識は「去世の業によつて受けた現世受胎の一念が母胎裡に定められる相である」と説かれて居るのである。即ち轉生の氣を受けた業因が苦・樂の果を感ずる業性としての本源の氣を定める相であるこいふことになるのである。ところが、これを論理的にいふと、「識は無明に掩はれて居るころの精神作用の根本であるから、これを活らきの方から一般的にいへば六識を統一的に見た活らきである」といふのである。こいふのは、識の實相こいふものが、業因の選擇的な活らきによつて一定の業性として轉生する受胎の氣を母胎裡に定める相であるから、それで論理的にはさうもいへるこいふまでのことである。事實この識の實相こいふものは意識以前の本能としての選擇力

そのものに外ならないのだから、夫れでさうもいへることになるのである。

次に、「名色」であるが、これは、「識に緣りて名色あり」と説かれて居る通り、母胎裡に轉生の氣を定めた業性が、こゝで、男女の別をこつた現實體として受胎されるに至る變相を現するのである。尤も、男女の別は無明裡に於て既に定められて居るのだが、無明から行・識を経て名色へ來る間の緣によつて變化させられる場合もあるから、それで、この名色に於てはじめて動かぬ形を與へられるこいふのである。だから、「名色の名は心であり、色は身である」と言つて、さうして「この二つを具備した業性がこゝではじめて一個の生命體として發育するに至る相である」と説いて居るのである。ところが、これを論理的にいふと、「名は生命的な活らきそのものであり、色は形體的な物そのものであつて、決して一個體に於ける心と身を指していふのでは無い」といふのである。こいふのは、名色の

實相といふものが、まだ身心二相の活らきを一個の生命體としての統一的な活らきに進展させきらない過程をこつて居るから、それで論理的にはさういへるこゝにもなるのである。

次に「六處」であるが、これは「名色に緣りて六處あり」と説かれて居る通り、こゝで、名色としての身心の二相が漸く融和・統一されて、一個の生命體としての形を成しおほせるこゝになるのである。だから、六處とは「眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が具足して出産されるに至る相である」と説かれて居るのである。こゝろが、これを論理的にいふと「六處は名色の中に含意くわんいされて居て次の觸受しゆくじゆが生起する依り所であるから、だからこれを、名色との對立的な活らきの上から見れば、六處を門として、そこから觸受が生起するのだといふ、その依存關係を細説したに過ぎない」といふのである。こゝいふのは、六處の實相といふもの

が、まだ六根としての活らきの形を具へた許りで、六根の活らきの對境である六觸・六受しゆくじゆなごの緣を招くに至らないから、それで、論理的にはさうもいへるこゝいふまでの事になるのである。

次に「觸」であるが、これは「六處に緣つて觸あり」と説かれて居る通り、六處として、單に形を具へたばかりのものが、こゝで漸く漫然とした感覺の活らきをもつやうになるのである。だから、觸は六根・六境・六識・六識の三が和合して、僅かに觸覺を生ずる二三歳ごろの相である」と説かれて居るのである。こゝろが、これを論理的にいふと、「觸は見るこゝか感じるこゝか考へるこゝかといふ一般的觸接關係しよくせつくわんに外ならないから、名色か識かしゆくじゆに含意されたものである」といふのである。こゝいふのは、觸の實相といふものが、單に去世の業因によつて傾向づけられた夫れぞれの特殊相によつて、たゞ漫然と觸れて見るだけのこゝで、それを意識的に

統一づけるこいふ活らきを有つに至らない状態だから、それで、論理的にはさうもいへるこいふこいになるのである。

次に「受」であるが、これは、「觸に緣りて受あり」を説かれてゐる通り、觸れるこいふだけでは満足されない本能の活らきが、動物的な傾向を以て活らき始めるから、こゝで、六道輪廻の様子も明らかになれば、九品・十界なごの別相も明らかになるこいふ變化相を現するのである。だから、受は、「苦・樂・捨の三受を了別するだけの活らきを有つて事物に接するが、まだ愛慾の識心を生じない十二三歳までの相である」を説かれて居るのである。こゝろが、これを論理的にいふと「受は六觸から生じた六受であつて、感受されるこいふには見るこいふ見わけのこいふ觸接が無ければならない關係にあるから、これもまた名色を識に含意されるものである」をいふのである。こいふのは、受の實相をいふものが、去世

の業因によつて定まる特殊の傾向を、こゝで判つきり善惡・賢愚等に分別づけたものとして活らかせるに至る状態であるから、それでこの受動的な活らきを論理的にいへばさうもいへるこいふこいになるのである。

次に「愛」であるが、これは、「受に緣りて愛あり」を説かれて居る通り、善惡・賢愚等に分別づけられた受動的な活らきが、こゝに至つて、菩提的に満足しながら愛樂して行くもの、煩惱的な不満に悩みながら愈よ渴愛して行くもの、こいふやうな別相をこつては居るが、愛はこいふ點では全く同じ態度の活らきを有つて諸境に活らきかけて行くこいふ變化相を現するのである。だから、愛は、「諸境へひかれて譯もなく溺れて行く愛慾一途の活らきではあるが、それを執念深く追求するやうな事はない十七八歳までの相である」を説かれて居るのである。こゝろが、これを論理的にいふと、「愛は満足を知らぬ能動的な渴愛の活らき

て、慾・色・無色の三界に互つて活らくこころの愛慾一般の法である」こいふのである。そして、「愛は、是れ以前の無明から受までの受動的な活らきに對立する是れ以後の能動的な活らきの最初であるから、無明が識の活らきの受動的な傾向の根本をなすやうに、愛は識の活らきの能動的な傾向の根本をなすものである」こいふのである。こいふのは、愛の實相こいふものが、受による諸境に陶酔的な夢を感じて果てしなく溺愛して行く活らきであると同時に、夫れが溺愛するこいふ靜的な點に於て無明を通ずるやうな相をこるから、それで、論理的にはさうもいへる譯になるのである。

次に「取」であるが、これは「愛に緣りて取あり」こ説かれて居る通り、愛の活らきに執著・固執の貪慾さを加へた活らきを現するから、善惡等の上中下品に互つた性格的な傾向がこ、で確定するこになるのである。だから、取は、「貪

慾が愈々増長して執著一途にはしる心のまゝに、諸境に互つて馳求・貪著して飽くなき相をいふ」こ説かれて居るのである。こころが、これを論理的にいふこ、「愛によつて取著するこいふその活らきの一般の法である」こいふのである。こいふのは、取の實相こいふものが、飽くなき貪著・愛取の活らきこして迷ひに迷ひを重ねながら諸境に馳求してやまないから、それで、飽くなき取著の活らきからすればさうもいへるこいふこになるのである。

次に「有」であるが、これは「取に緣りて有あり」こ説かれて居る通り、性格的に傾向づけられた取著の迷ひが、こ、で業果的に決定されるこになるから、善は善・悪は悪こして夫れぞれに決定した据りをこつて了ふのである。だから、有は、「愛取の煩惱によつて、現世一期の業行を定めて、來世の生を招く、因を積集する相である」こ説かれて居るのである。こころが、これを論理的にいふこ、

「有は時間的に無常・流轉する存在にして有るこいふ、その有るここ一般の法なり」こいふのである。こいふのは、有の實相こいふものが、個別的に特殊な傾向をこる業性^{ごふしやう}としての据り^{すぢ}をこつて活らく相であるから、それで、据りをこつた活らきが有るここ一般の法に通ずる點でさうもいへるこいふここになるのである。事實、有こしての据りをこつた五十歳からの人になるこ、修行によつて人それぞれ^{それ}の性分である業性を淨化させて行くここが甚だ難^{むづか}しくなつて來るのである。夫れは、出來あがつた料理の味こいふものが、後こからは殆んごなほらないこ同じやうにである。さうしてなほすこなれば、先づ新しく作りかへるほごの手をかけなければならぬやうにである。竟^{つま}り種^{たね}が實^みりかけて來たからである。實りかけて來世の生が感じられる過渡期に入つたからである。だから、この有で、六道輪廻の相こいふものが、四聖^{せう}・六凡^{ぼん}の別に於て分明^{ぶんめい}にされるここになるのである。

ある。

次に、「生」であるが、これは、「有に緣りて生あり」こ説かれて居る通り、こ、で現世の生の氣によつて來世の生の氣が決定されて了ふここになるから、それで今迄こは急に違つた人のやうになつて、老境に入つたからだこいはれるやうなここになるのである。だから、生こは、「現世の感業によつて來生の生を結ぶ相である」こ説かれて居るのである。こころが、これを論理的にいふこ、「生は因果系列の最初のものこしての生ではなく、時間的に過ぎ行く一切の物事の初めを意味するものでなければならぬから、即ち生は生ずるここ一般の法である」こいふのである。こいふのは、生の實相こいふものが、去世の業による活らきこしての現世の業が有に於て決定的な据りをこつたから、そこでまたその現世業が業の活らきの自然過程こして來世の生を感ずる活らきへ轉じた相であるから、それで、業の

活らきがこの生に於て要約的な因縁いんねんしよしやう所生の相に於て感じられるこいふ點ではさうもいへるこころになるのである。

次に、「老死」であるが、これは、「生に縁つて老死あり」を説かれて居る通り、生で感じられた來世の生がこゝでは殆んど現世の生を覆おほひつくした相をこるから、その來世の生に煩はされて、今世の死が當面の事として感じられながら、何んにしてもその死の上に安心がおけない許りか、却つて今迄よりも生に對する執著が強くなつて、愈よ濃くなる無明の影に覆はれたまゝ、末期まうごの息をひきこるやうなこころになるのである。だから、老死は、「來世へ無終の業因を残して消滅する相である」を説かれて居るのである。こころが、これを論理的にいふと、「老死は單に老死を意味するのではなく、生・老・死を推移する法としての無常苦を意味する」をいふのである。こいふのは、この老死の實相をいふものが、來世の

生即ち無明の影を現世の生の上に湛たみへて、全く無常の死苦にこざされきつた相をこつて居るから、それで、生死無常の苦相がこゝで要約的に感じられるこいふ點でさうもいへるこいふ事になるのである。事實、老死の境に至つて無やみにもがき出すこいふのは、生死無常の苦相が、例へば寒暖の氣のやうにそれもなく不斷に感じられて來るからである。さうして、この生死無常の苦相に鎖とぎされたまゝ、一期の終をこるこころになるのであるが、こもすれば、諸惡を集めた業性の因縁によつて、全く死におちいつた形をこつて、脈搏も呼吸も體溫も無くなりながら、尙ほ不意に眼を光らせるこか口を動かすこかこいふ不思議相を現ずるから、夫れ注射を夫れ人工呼吸をなご、騒いで應急手當をしても、尙ほ復活しないこいふ死相をこる者もあるのである。が、これは、軀からだばかり死んで心が死なゝいこいふ變相をこるのである。だから、死んだと云つて泣き悲しまれるこころも、そればかりに應

急手當をされることも、死んだとされて焼かれるなり埋められるなりする事も知つて居ながら、さて夫れを何うすることもできずに葬られて了ふことになるのである。斯うした無殘な實相が、禪定中では如實に觀得されるのである。だから、この老死を苦の集積相であるといふのである。さうして、これから無明へ輪廻して行くことになるのだから、だから、この十二緣起は生死流轉の輪廻を説く根本法であるといふことになるのである。

さて、是れで、各支の説明だけは終つたのであるが、更にこれを綜合づけた輪廻の上からすれば、無明と行きの二支が去世の感業の因といふことになり、識と名色と六處と觸と受との五支が去世の感業に緣つて定められた現世感業の果といふことになるから、この因果相が過現一重の因果となり、それから、愛と取との二支が現世の感で、有の一支が現世の業であるから、これが現世感業の因といふこ

こになり、生と老死との二支が現世の感業に緣つて來世感業の因を招くべき果といふことになるから、この因果相が現末一重の因果となり、更にこの現末一重の因果と、前の過現一重の因果とが相互不可分の因緣果の關係を結んで居るから、これを過去・現在・未來に互る三世兩重の因果といふのである。さうして、この因であると同時に果であるといふ十二支三世兩重の因果關係といふものが、これが即ち因緣所生の人生を貫く法であると同時に宇宙萬象に於ける因緣所生の法、即ち生命進化の理法であるといふことになるのである。

ところが、これを論理的にいふと、十二緣起の各支は、元來釋尊が老死の苦から出離を求めて、何にがあるとき老死があり何にを緣として老死があるかを思念諦觀して、さうして、生に緣つて老死ありと觀じ、更に生から有へ有から取へ、遞次に觀じて無明に到達して、さうして苦の根本を識得したのであるが、これを

更に方便化して苦の滅度を成ずる爲に、無明に縁つて行あり行に縁つて識ありこいふやうに順次に觀じて老死に到達する「あり」の順觀ミ、老死の滅に縁つて生が滅し生の滅に縁つて有が滅するこいふやうに逆次に觀じて無明の滅に到達する「滅」の逆觀ミによつて、甫めて苦から出離する道を明らかに明らめて涅槃の妙智を開發されたのであるから、斯うした釋尊の諦觀による十二緣起の法こいふものは、各支が皆な等しく縁つて起る關係を意味するものではなく、縁つて起つ關係即ち相依して居る關係を意味する、眞實の認識の法である」こいふのである。

こいふのは、釋尊が三十五歳の御時に、六年苦行の縁を證して轉じられた菩提樹下に於て、夜半廓然ミ大悟された眞如の法が、即ちこの十二緣起による無上の正法であつて、夫れがしかも一心を攝した丹田に、一切有情の六趣輪廻の宿命相こいふものが、恰う鏡中の影像を見るやうに映寫されて來たこいふ、その十

二緣起の實相によつて、一念相續の正法を諦觀されたこいふのだから、夫れで、この十二緣起の實相こいふものは、一面からすれば客觀的な無明緣起であるこ同時に、また一面からすれば主觀的な業感緣起であるこいふ、この一面の理から、十二緣起の本義は、主觀ミ客觀ミを超えた論理的な立場に於ける法こしての相依關係であるこもいへることになるのである。

事實、何んな立場から何んこでも言へるのが十二緣起の實相なのである。だから、具體に説く小乗の説も正しければ、抽象的に説く大乘の説も正しい、いや人の爲に方便づけられてこそ其の本義が生きて來るこいふ事にならなければならぬのである。究理の爲に妙趣を失ふやうな事があつてはならないのである。さうである。洵に釋尊の救世の本願の爲には、何々の説が正しくて、何々の説は誤りであるなぎ、定めて了はれるものではないのである。言説を超えた信心に依つ

て證得せねばならぬが、即ちこの十二緣起の本義なのである。

これで十二緣起の事は一と括りついた譯であるが、さて、言葉で説くといふことは、夫れがどんなに眞に近いと云つても、結局繪に描いた餅、話に聞いた名所で、遺憾ながら事實に遠いものである。だから、佛道の眞諦は一字不説の彼岸へ身心一如の修行によつて度らなければ證得されるものではないと戒められて居るのである。此の意味からすれば斯ういふ文字を弄することが、また一つの躓きの石となることは勿論である。だから、この文字は、實相・實悟の百尺竿頭轉一步の妙機が得られる踏臺として、僅かに許されるものであらうといふに過ぎないのである。がしかし、佛敎の妙趣からすれば、矢張り罪過は拔舌・瀾天たるをまぬがれえないのである。

第四章 身心淨化の法門

一 信ずる心

萬人は、緣起の實相に通達して、そこではじめて、信心・修行の心を起し得るものである。即ち、萬人相犯の煩惱を轉じて、萬人和合の菩提を圓成しようとする心せずには居られなくなるものである。と、いふのは、萬人は、例外なく、因緣によつて然らしめられて居る偏倚性を本有性として稟受して居るが故に、其の偏倚性によつて自然に煩惱つけられて居るものであるといふところが、緣起の實相の上で無理なく識得されることになつたからである。

そこで、先づ信ずる心であるが、これは、教義によつて導かれるがまゝに、その生活を是正して行く素直さを持たなければならぬ。何故かといへば、萬人の生活の現實に於て、濫りな肯定、即ち妄信的傾向をこるこいふことは、濫りな否定、即ち懷疑的傾向をこるこ同じ過誤に墮するからである。事實、妄信と懷疑とは共に批判なき俗見による偏頗至極な反社會的生活態度であるが故に、夫れは必ず自滅傾向をこるの外なきに至らしめられる跌きの石だからである。信ずる心こいふものはさうした偏頗な活らき方をするほご我見・一途な心であつてはならぬものである。

純眞・明敏な信心の活らきこいふものは、教へられるがまゝに疑ひなく行爲するこ同時に、その教への形式と内容とを生活經驗によつて身・心一如の體驗とし、稟性的に秩序づけて行く可きものである。だから、佛教の信心に入つたからこ

云つても、不如意な事は一切を佛菩薩の力のみによつて如意自在ならしめようこ貪欲するやうでは、決して利益されるものではない。それは、小兒が母を妄信して譯もなく難かりかけて行くに等しい、寔に素朴ではあるが厄介千萬な無智の蒙心である。終には、小兒が母に叱責されるやうに佛罰を被らなければならぬもののである。即ち、即心是佛であり得可き自己を、利己心の爲に果てなき苦難の淵に墮せしめなければならぬ事になるのである。また、科學を信ずるにしてもさうである。一切の物事は全部科學的に解決され得るものこすることは、それは、甚だしい非科學的態度であり妄信であるこ同時に、科學の價値を損じ、自己の無智を暴露するに過ぎないここになるのである。科學には、自から定まる限界即ち、物事を扱ふのには、夫れを必ず物質的・分拆的に置きかへて、さうして更に夫れを普遍的に概念化して理解するこいふに止めねばならぬ限界がある。だか

ら、不斷に活らいて停まることのない生命現象に對しては、甚だしく不向きである。物事を分拆的・物質的に扱ふ上に於ては萬能なものではあるが、綜合的・生命的には殆んど無能なものであるといふ自から定まる限界を有するのである。是れが、科學そのもの、眞價である。だから、これに價値以上の能力を感情的に附加することは、最も慎まなければならぬ。それが、こりもなほさず妄信することになるからである。大は小を兼ねるを謂つても杓子は耳搔きにならない。そのやうに、物事には凡て自から定まる本有能力の限界といふものがある。だから、その能力の限度といふものを識つて用ゐることを忘れてはならない。信ずるこいふことは、その能力の限度を識つて生活化することであつて、決して、その限度を超えて活らくやうに考へたがる感情を交ゆべきではない。

眞の分析觀といふものは、生きた全體の爲に綜合的に活用される知識でなければならぬ。同時に、生きた全體はまた他の生きた全體との相互關係によつてその存在を保持されて居るものであるといふことを、明確に知る知識でなければならぬ。でなければ、正しい科學知はならないのである。

分拆は、綜合に相對的に活らかせる筈の知識である。例へば、神佛の尊像を觀るにしてもさうである。木の端・石の缺らに過ぎない物體に特殊な表現形式を與へて居るその内容は謂へば、それは、謝恩の純情の對照として普遍的に永久化された祖先の眞心そのものであるを觀るこころの分拆觀、それを轉じて、形式に内容を不二・一如に有機づけて一つの生命體として觀る綜合觀が、稟性的に融通づけられて活らくのでなければ、決して正しい尊像觀はならない。けれども、この科學的態度では未だ、尊像を一つの生命體として觀ることはできるが、それを眞心の對照として敬虔な信心をもつて禮拜するこいふ心にはなれないので

ある。月夜の美しさを識ることはできるが、その美しさに融合するこいふことはできないのである。こゝが、自から定まる活らきの限度に外ならないのだから、科學的な態度では絶対にこゝを越えることはできない。だから科學的な立場から宗教を云々するこいふことは、ひごく難かしいことになる譯である。兎もすれば見當違ひの蒙語を放つて嗤はれなければならぬことになるのである。空氣が食べられないからこ云つても、その爲に空氣の價値は下らない。否、流用の出來ないところにその尊い眞價は存するのである。

神・佛の尊像は、至純な人情をもつて禮拜するところに、その偉大な活らきを現するものである。瞑目・合掌して禮拜するこきこそ、人間が完全に無我になれるこきである。即心是佛のこきである。その時の心こいふものは、全く純眞・清淨であつて、肉體こいふ形式を越えて生命的に宇宙の偉大さに融け込んで了ふの

である。よしそれが、利益を欲する利己心によつて瞑目・合掌したにしても、夫れは例へば、弓を取つて的に向ふ心は欲求的であつても、いざこ、矢頭をはかつて立ち上つてからの心は、それは全く無我に澄まされて、忽ち的中へ融け込んで了ふやうに、合掌以前の心は利己的であつても合掌すればそこで忽ち無我の純眞さに満たされて、廣大な神佛の慈悲心に融け込んで了ふものなのである。さうしてこの的ニ融合する心が弓術の妙境に達する心であるやうに、合掌する心が聽て信心の妙境に達し得る心になるのである。

さうである、佛教に於ける信心の妙は、御佛の廣大な慈悲心に融け込まなければ味得されないのである。信心は、子が親を信じるに等しい心でなければならぬのである。親によつて子の生活があるやうに、祖先の眞心の綜合的な活らきによつて現世に於ける萬人の存在が保證されて居るのだから、従つて子が親に對し

て持つやうな謝恩しゃおん・思慕しぼの心を、萬人は、その親である綜合祖先の靈前に捧げなければならぬ。祖先の真心の綜合表象である佛像を禮拜しなければならぬのである。

禮拜の心は、即ち無我・清淨心であるから、それが忽ち佛心に融合して行くのである。合掌すれば忽ち現ずる無我・清淨心といふものには、必ず寸毫すんがうの我執も活らかないのを常とするから、それで、宇宙生命としての佛心に融合して行くといふのである。否、無我・清淨心が佛心そのもの、一活現體に外ならないのだから、萬人は、合掌・禮拜によつて、自己の裡に佛心の活相を感得するこゝが出来、即心是佛の譯になるのである。この、自己の裡に佛心を感じ得るこゝが、即心是佛の妙相めうさうを識る第一歩なのだから、それで、合掌・禮拜といふ形式が尊重され傳統される事になつて居るのである。さうである、萬人がその生活裡に於て無我・清

淨心の機微に觸れ得るには合掌・拜禮を機契きけいとするより外に道はないからである。事實、合掌・禮拜以外の形式によつて、無我・清淨心を活現させるこゝがこゝは不可能である。それが、信心の有無に拘らず、合掌・禮拜しさえすれば、それで、萬人が即座に無我・清淨心を現じ得るこゝが形式なのだから、だから、時代を超えて尊重されて居るのである。それは、歩くこゝがこゝが身體を運ぶ唯一の形式であるやうにである。

萬人は、この合掌・禮拜によつて、瞬間的な佛心の閃きを感じ得るこゝができるやうになるこゝ同時に、その清々しい感じにひかされて、つい朝に夕に繰り返さずには居られない不思議な希求ききゆうを持つやうになるものである。即ち、何時いつもはなしに、無我・清淨の佛心にひたるこゝを法悦ほふえつするやうになるものなのである。

これが、信心の成ぜられる過程であつて、さうして、これがまた、日常生活裡

に於ける熱慮・斷行の金剛不壞心が成ぜられる過程であるといふことになるのである。即ち、合掌・禮拜といふ形式によつて自然體得される無我・清淨の心といふものが、朝・夕繰り返されて行くうちに練れて、それが何時知らず日常生活裡に活現するこゝになるこゝ、人々は、その清淨心の活らきによつて、如何なる急變に遭つても至極落着きはらつた思慮・分別が保持されるこゝいふ功德が得られるこゝになるのである。迷信形式だといふ合掌・禮拜によつて、人々は、物事に動ぜぬ心、即ち熱慮・斷行の金剛不壞心を養ふこゝができるのである。それは身心が一如に練れて行くのだから、それで、急變に遭つても吃驚して進退の度を失ふこゝいふやうなこゝは絶対に無くなるのである。だから、合掌・禮拜は生活に即した價值に於ても亦有意義であるといふこゝが無理なく肯けて來なければならぬこゝになるのである。

物事に動ぜぬ落着きが得られた生活であつてこそ、人々はその日々を安穩・怡樂に過して行く法悦にひたるこゝができるのだから、それで、萬人は先づ信心の道につかねばならぬものであると謂はなければならぬのである。事實、信心の芽、即ち相互扶助の和合心の芽といふものは、例外なく萬人の心に本有されて居るものなのだから、それで、生きた信心は日常生活程に於ける朝・夕の合掌・禮拜を機契として經驗的に修め養つて行く可きものであると謂ふのである。

さうである、萬人は、純眞・敬虔な心をもつて感謝・懺悔の生活を佛戒による修行によつて徹底させ、馳ては利己を超えて活らく菩提心を成じて、それ自身の稟性を創造的に活らかせ得るまでに、忍苦し精進しおほせねばならぬものなのである。無我の妙心を宇宙生命的に活らかせ得る融通・無碍な境地を闊いて、一人の心は即ち萬人の心であり、萬人の心は即ち一人の心であるといふ、眞の自由

こ幸福この生活の妙味を味識するに至る信心を戒律的に體得せねばならぬものである。

二 修行の第一歩

信心・修行の第一歩は、**發菩提心**、即ち發自覺心にある。即ち生活理想を具體化す可く一念を發起させるこいふこゝでなければならぬ。

一念發起の心的内容は、先づ以て身心の因果的如相を考察するこいふ叡智的な立場に於ける思辨を徹底させるこゝでなければならぬ。さうして延いては、自己環境の因果的如相を、一にして多・多にして一であるこ謂ふ、社會的な平等即差別の妙趣を徹底させるに至らねばならぬのである。でなければ、社會的教養豊かな人格こいふものは玉成されないのである。

萬人は、何時の日か必ず發菩提心によつて、その無明的煩惱心を光明的菩提心に練りあげずには居られなくなるものである。生活の現實裡に於て經驗的に練りあげずには居られなくなるものなのである。事實、さうした社會意識によつて、萬人はその稟性の真相を如實に識得するに至るものであつて、さうして、その眞如性を識得するこいふこゝが、即ち悟りを開くこゝか、見性するこいふこゝになる譯なのである。だから、悟りは、人々工夫の精進によつて開けるものであるこいふのである。蓮華の開くのは一瞬時であるが、その時に合ふまでの成育こいふものが容易ではない。そのやうに、内省の忍苦によつて身心の活らきを成育的に一致させ得るこいふその時が、見性・開悟の時こなるのである。だから、一夜漬の悟りは、何事かに遭へば忽ち臭氣を放つて、人をして思はず眉をひそめさせるこゝになるのである。蒔いた菩提の種だこて、一日一夜で匂やかに華咲く筈はない。

だからこそ、佛教に於ては、菩提に、三種、五種なき、謂ふ別を立て、菩提心に二種、三種なき、謂ふ別をたて、忍苦・精進の格律を示して居るのである。が、それは、要するに、煩惱を轉じて菩提に化す修行階梯の種々相に外ならないのだから、今は略して、五種菩提だけ擧げておくことにする。

五種菩提の、一、發菩提心は、無量生死の中に於て、無上正覺の爲に、大菩提心を起すことであり、二、伏心菩提は、煩惱生活裡に於て、善くその心を調伏して、生死執着の此岸から、生死解脱の彼岸へ渡る工夫をすることであり、三、明心菩提は、三世諸法(過・現・未三世の因果的有機關係)の實相(宇宙生命の眞如相)を観察して、心地を明了めうれつにすることであり、四、出到菩提は、般若(智慧)を活かさながら、その般若に偏着せずへんぢやくに、能く諸惑を斷滅だんめつして、三界(慾界、色界、無色界)を出離しゆつりして、佛果(萬行所成)に到達することであり、五、無上菩提は、諸

種の煩惱を完全に斷じつくして、無上菩提の光明心地を實生活裡に活現することであることである。この過程によつて、佛道、即ち人間の生活理想は圓成されるものであること説いて居るのである。だから、發菩提心といふことは、萬人が人としての生活意識を経験的に覺醒させること外ならないのである。

そこで、生活意識を経験的に覺醒させることいふ、その實修・實悟の過程はことごとくなるのであるが、是れは、筆舌による理解にまつべきものではなく、身心一如の修行によつて實證・覺解すべきものであるが故に、當然佛門の授戒法要に參ぜねばならぬ事になるのである。授戒會じゆかいえに參じて、次に示す十六條の戒法を實修・實悟する精進心を發起させねばならぬのである。

十六條の戒法といふは、歸依佛・歸依法・歸依僧の三歸戒さんきがい、攝律儀戒せつりつぎがい(一切の惡を捨離する戒)・攝善法戒せつぜんぽうかい(一切の善を奉行する戒)・攝衆生戒せつしゆじやうかい(一切の衆生を

利益する戒)の三聚淨戒じゆじやうかい、不殺生ふせつしやう・不偷盜ふちゆうたう・不邪淫ふじやゐん(以上の三が身業しんぜふ)・不妄語ふまうご・不兩舌ふりやうぜつ・不惡口ふあくく・不綺語ふきご(以上の四が口業くごう)・不貪欲ふどんよく・不瞋恚ふしんゐ・不邪見ふじけん(以上の三が意業いごふ)の十善戒(十惡の制戒)までである。これが、小乘二百五十戒に對する大乘十六戒に外ならないのである。

佛教に於ける戒律の起源は、釋尊在世時の教團に於ける規則として、徳誼上・信仰上の犯罪者が出る度に制定された小乘戒であるがゆゑに、自然その條項が、複雑・繁鎖はんさな形式に墮するに同時に、甲には必要な禁戒が乙には殆んど不要に等しいといふやうな缺陷を生ずるに至つたものである。そこで、これに對する大乘戒が、宇宙の根本理法を基礎として制定される事になつたのである。だから小乘戒は他律的であるが、大乘戒は自律的であるといふ本質的な相違を有つて居るのである。

斯うした過程をこつて發祥した大乘の十六戒であるが故に、煩惱具足の萬人は、この戒律によつて、はじめて眞の成佛道、即ち自己完成の菩提道を開き得ることになるのである。だが、この戒は、外から強制される戒ではなく、内から自然に守らねばならぬ戒であるが故に、たゞ一途にこの戒を嚴守したからこゝで、また嚴守せんを努力したからこゝで、それで加行・成道が遂げられる譯のものではない。また、一度授戒會に參じたからこゝで、夫れで遂げられはしない。それは、俗に謂ふ「てんから和尚にはなれない」の道理である。これは、必ず授戒會に於ける加行かぎやうの經驗を基るこゝして、夫れ自身の身こ心の一致境をその日々の生活裡に開拓して行く不斷の行願によらねば成ぜられぬものなのである。

持戒・加行の生活いふはは、佛戒を奉持ぶぢして行願を増加して行く生活の謂ひであり、煩惱による十惡の生活を菩提による十善の生活に轉化させて行く生活の謂

ひである。だから、十六の戒にこだはるうちは未だ駄目である。自然にこだはらなくなつたのでなければ實際の役にたかない。戒法を自由に使ひこなして行く自在力が出なければ、佛法の有り難さも其の人の眞の妙味も出ては來ない。味噌の味噌臭さがぬけなければ上味噌は謂はれない。

煩惱具足の生活さいふものは、例へば操縦法を知らずに自動車を運轉するやうなもので、電柱に打つかつたり溝にはまる位さの事は些細な間違ひで、時には曲り角を眞つ直ぐに突つ走つて、九死の崖下へ顛落したり、往來の犬を避け損つて人を傷つけたりするやうな大間違ひを繰り返しながら、未だ自分が操縦法を知らない事には氣づかず、やれ電柱が悪いの犬が悪いのさ頑張つたり、怪我をするか車を毀すかすれば、自分ほご運の悪い者はないさ、運の方へ飛んだ恨みを向けたりして、猶ほ耻ぢを知らないやうなものである。夫れほご我が強いから、操縦法

を習へさ云はれても、決して「はい」は云へぬ。云へば耻ぢださ心得て居る。

ところが、人身心の操縦法である佛戒による信心。修行の生活さいふものになれば、佛戒さいふその操縦法によつて、萬人和合の菩提道を走らせて行くことになるから、そこには、何んの間違ひも不運もある筈はないことになる。いや、初心のうちにはよく過つ。だが、過てば懺悔し、過たねば感謝しさいふ敬虔さを以て、無我の純情を致して居るから、決して自他を損ふやうな危険はない。順に従つて不平も不満も持たないから、従つて十六の戒法が何時知らず身につけて、自然に菩提心が感ぜられることになる。

このやうに、佛戒は自動車に於ける操縦法のやうに、萬人の心を正しく活かせる練身心の妙法に外ならないのである。煩惱的放從性を菩提的自在性たらしむる法に外ならないのである。いや、佛戒は、自然現象が春夏秋冬の軌則によつて

運行するに同じ意味に於ける人間生活の軌則そのものに外ならないのである。だから、春夏秋冬が意識を超えた自然力によつて運行するやうに、佛戒も意識的努力を超えた一つの自然力として活らくやうに生活化されねばならぬものである。故に重ねていふ、戒律は理解すべきものでは無く體得すべきものである。

そこで、授戒會に於ける十六の戒法を、其のまゝ、日常生活の法として眞に役立たせんとするには、萬人は尙ほ進んで坐禪の修行に入らねばならぬといふことになるのである。こゝにいふのは、萬人は坐禪によつてはじめて、日常の生活裡に於ける自己を通して夫れ自身の稟性を陶冶し把握し得るに至るからである。

事實、萬人は坐禪によつてのみ、その日常生活に於ける俗心の活らき方を對照して考察を深め擴めて行く立場から、自己の稟性によつて特殊づけられて居る心意の活動傾向を見出して、それを戒律的に生かして社會的に融通無碍ならしめ

得るに至るものだからである。

だから、「梵網經」菩薩戒の序には、「戒は法城の塹たり、能く煩惱の賊を遮ぎる。戒は勇猛の將たり、能く魔軍の衆を摧伏す。戒は如意珠たり、能く商人に寶を與ふ。戒は妙樓の觀たり、諸の三昧に遊戯す。持戒を平地に爲し、禪定を屋宅に爲して、能く智慧の光を生じ、次第に明照を得。定慧の力莊嚴して、萬行具足す。爲し、乃至佛道を成ずるも、悉く猶ほ戒を本に爲すなり。」と説かれて居るのである。潛心味識して、戒法の本義に通達すべきである。

三 信心の徳行・六度

大乘十六戒の戒法を受けて戒壇上に合掌すれば、瞬間、ひたし清淨無垢の氣にひたされ了るものである。

この清淨無垢の氣が、即ち本有の佛心そのものであり、無我の清淨心そのものの現はれになるのである。

だから、形の上からいへば僅か七日の加行に過ぎないほんの形式ばかりの修行ではあるが、そこに大きな利益が存するのである。他の修行形式では容易に経験するこのできない瑞氣に、忽然とひたされ了るここができるのである。有り難いことである。こゝに、授戒會の本來の尊さがあるのである。

だが、多くの人々はこの尊い経験をよそにして、「衆生佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じうし己る。眞に是れ諸佛の子なり。」と言はれたのだから、夫れで自分は佛様と同格になつたのだと思ひ込んで、つい迂かうか十六戒の外へ我見・我欲の手足をはみ出させて居るやうであるが、これは洵に困つた事である。授戒について佛様のお子になつたのだから、慎まなければならぬの

に、佛様のお子になつたのだからこいつて、却つて自だらくになるから困るのである。こゝが、修行苦を経ない者の悲しいところである。

だから、授戒についた人々は、戒壇上に於ける清淨心の閃めきを何うしたら日常生活裡に生かし出せるかを工夫しつゝ、精進しなければ、受けぬに劣る外道に墮し了る懼れがあるのである。戒心すべきである。だが、一度は清淨心にひたされた尊い経験を有つて居るのだから、さうした瑞氣を知らずに忍苦し精進する修行より、そんなに力強いか知れないものである。

一度経験した無我の清淨心の方へ、日々工夫しつゝ、精進して行く敬虔さを失ひさへしなければ、夫れで必ず佛菩薩の位にのぼるここができるのである。十六の戒法を眞心こめて奉行して行きさへすれば、夫れで必ず諸佛の位を同じうし得るに至るのである。即ち十六の戒法が身心一如の活らきとなつて、日常の茶飯事の

上に生きて來るのである。無意識に動かす手足が、其のまゝ、戒法にかなつて自他一如の和合相を現げんずるのである。其の身が其のまゝ、佛ぶつとなり了るのである。だから、戒壇上の清淨心が即ち導師であるといふここにもなるのである。

さて、これから愈よ大乘の境地がひらけることになるのである。今迄は、大乘の立場からではあるが、小乗を云々しまた權大乘を云々して、ひたすら轉迷開悟の爲につくして來たのだが、こゝからは大乘の境地になるのだから、こゝで今迄の言葉を反復はんぷくめうげ妙解めうげして眞空しんくうの妙境をひらかれたのである。

だが、この境地はまだ大乘の初地しよちであるから、敬虔さを忘れると忽ち煩惱の垢智しちに煩わづらはされて、凡人の常識で色づけられた眼鏡越しに物事を見る懼おそれがあるから油斷ならないのである。ふつと眞如の相が見えても、夫れをはてななばかり色眼鏡で見なほすやうな事があるから怖おそろしいのである。

そこで、日常生活裡に於て自利・利他の菩薩行を圓成して行く修行法として、六度の行法といふものが定められて居るのである。

「六度」といふは、煩惱・迷妄の此岸から涅槃・妙悟の彼岸へ度わたる六つの徳行のこゝである。尙ほ「度」といふは梵語の「波羅蜜」が譯されて「度」といふ「到彼岸」たうひがんとよめる言葉である。

それから、妙悟の彼岸へ度わたる六つの徳行といふは、一、布施ふせ(慈善)、二、持戒ぢけい(修養)、三、忍辱にんじやく(忍耐)、四、精進しやうじん(勤勉)、五、禪定ぜんぢやう(靜慮)、六、智慧ぢぢ(叡智)であつて、萬人はこれによつて、貪どん、瞋ちん、癡ちの三不善根から起る煩惱を斷除せねばならぬのである。といふのは、六度に對する煩惱の六蔽いがあるからである。即ち布施に對して慳貪けんどん、持戒に對して邪見じやけん、忍辱に對して瞋恚しんい、精進に對して懈怠けたい、禪定に對して散亂さんらん、智慧に對して愚痴ぐぢといふ由々しい妄念が深く根を張つて居る

からである。だが、この六こいふ数は、凡そ六様に分別づけられるから六つに分けたまでの事であつて、實は煩惱即菩提を活らく心の上に歸一されるものである事を識つておかなければならない。即ち心一つの活らきが六様に現ずるのだから。だから、この六様の現相がまた、どれか一つの現相を中心として考へれば、その一つの現相から他の五様相が分派して居ることも考へられるやうな共通相をもつて居るのである。即ち、一にして六、六にして一であるこいふ洵に微妙な關係をもつて居るのである。

夫れからまた、この六度の行は、彼の戒壇上に於ける無垢の清淨心を以て奉行されなければ、萬人和合の妙法である六度が、萬人鬭争の妄念である六蔽となる惧があるから、常に審細の用心を怠つてはならないのである。一點の垢智からこんだ過誤をまねくここになるのだから、夫れは極端な潔癖さを守らなければなら

ないのである。此の位るはい、だらうこいふ其の不精さが、即ち寸善尺魔の世間相をまねく基るこなるからである。己れ獨りを慎む眞心がなければ、決して諸佛を同じうし得るものではないのである。

そこで、妙悟の彼岸へ度つて諸佛を同じうし得るこいふ六德行に就て、あるが、先づ布施から述べるここにする。

「布施」は、宇宙間に於ける一切の物象が、等しく相依り相扶けて繁榮して行く、その相互扶助の本然力のここである。夫れは、當に人體に於ける諸機關が、相互に利益しあつて行く、其の本然力の活らきと同じ活らきを指していふのである。だから、布施の行こいふものは、太陽が今日は嬉しいから良く照してやらうこか、今日は面白くないから照してやらぬこかこいふやうに、我見や我欲で照したり照さなかつたりしないやうに、有るがまゝの力を無理なく活らかせて行くここ

に外ならないのである。さうして、其の無理なく活かさせて行く力がまた無理なく他に受けいれられて、そこに自然の相互扶助が成り立つといふことになるのである。だから、お互に無理なく活かさせて居る力が、其のまゝ、扶け合ふ力となつて、お互に利益し和合しあふといふこと、これが布施の行そのもの、本有相であるといふことになるのである。

こいへば、人間は生れながら其の通りの布施の行を營なんで居るのだから、今更らしく布施の徳行を修める要は無い筈だこいはれるかも知れない。いや、一切の人間が是非さうあつて欲しいものである。が、事實はさうでない。其の生れながらの本然力が、煩惱の垢智によつて等しく歪めつくされて居る。斯うすれば得だ彼あすれば損だこいふ妄念から、一寸先も満足には見えぬ垢智の眼で、^{あた}ら辺りを見まはしながら常に本然力を歪めて活かさせて居るから、従つてお互に利

益し和合しあへる力が、お互に^{かた}掠め合ひ、憎み合ふ力となつて活かしくより外ない事になつて居る。即ち、萬人和合の力が、萬人鬭争の力となつて活らいて居る。だから布施の徳行が説かれなければならないことになつたのである。

この意味に於て、布施の行が、法施、財施、無畏施の三に分けて説かれることになつたのである。

法施といふは、本然力の活らき方^{かた}といふものが宇宙生命本來の活動法則にかなつたものであるから、萬人はその法則を自己のうちから垢智の雲を拂つて判つきり見出すと同時に、夫れを他人にも及ぼして利益し和合しあふといふことである。さうして、法則通りに活かしく力を施し合ふといふことである。即ち、自分を練磨すると同時に他人を教導するといふことである。心の上の行である。

また、財施といふは、心珠・身寶を垢智の雲の上に輝やかせて、自利・利他の

生活を圓滿させるこいふことである。本然力が法則通りに磨かれて、夫れが自然に自他一如の活らきこしてお互に利益し和合しあふ種なるこいふ、其の種が即ち財である。身を以て心珠・身寶を施し合ふことである。自他にも喜ぶ和合財が、日常生活の上に生きて活らくこいふことである。身の上の行である。

また、無畏施むゐせこいふは、宇宙の法則通り我見・我執を超えて活らくやうに圓成された法施の心こ、その心の活らきが無理なく身の活らきこなつて言行の上に現はれるやうに圓成された財施の身こが、更に進んで自然な融合をこげて、夫れが完全に善惡の意識を超えて、例へば太陽が意識なく照して過たないやうに、地が意識なく潤うるほして過たないやうに、そこに些すこしも過あやまつ畏おそれなきを施し合ふこいふこと、その事である。即ち、身心こもに圓成されて自然に諸佛位を同じうするに至つたことである。宇宙生命の活らきこ自己の活らきこが完全に一致したところ

のこことである。柳は縁、花は紅のいろく、其のまゝの相すがたたで和合しあひ施し合ひして、そこに煩惱即菩提の實相を現あらわすことである。身心一如の上の行である。

これが、布施の行の三様相である。猶ほこれが、修行の方便上から四種、五種、七種、八種等に分別されて居るが、夫れは暫く措おいて、身こ心こを日常の茶飯事の上に練りあげて、聽ては完全に我執・我見を超えた身心一如の和合相を現あらわすこいふここと、即ち布施であるこいふこところに眞心を潜めて精進されたいものである。尤も、この三種布施が普通には、「法施はふせこは法を説いわいて他を度わたすなり。財施さいせこは財を施して貧を救ふなり。無畏施むゐせこは無畏を施すなり、即ち他の危難を救ふなり。」と説かれて居るから、夫れを下手に解釋して相手も時も所も考へずに無やみに施して嬉しがつたり口惜しがつたりするやうな悲喜劇を演あずるこことにもなつて居るのである。洵に残念な事である。残念こいへば、「布施はふせこは梵語壇那の譯に

て福利を他に施與するこころなり。』とか、「施行種々なれど財物を施與するが本義なり。』とか説かれて居るから、夫れでつい淺く解釋されて過たれるこころになつて居るから困るのである。だから、布施の行を下手に行つたら大變であるといふのである。即ち、必ず惡行を化して自他を損ふに至るものである。布施の行は、例へば傳家の寶刀の如きものであるから、用ひ所を過つたら一大事である。だからして、「其の用ひ所を分明に識得して妙用・利生の功德を現せねばならぬ」を説かれて居るのである。

次には「持戒」である。大乘十六戒の戒法が差す手・引く手の末にも現はれて妙融自在に活らくこころまでこなれなければ戒を持するこころはいへないといふ、身心一如の戒相を圓成するこころである。

「迂つかり戒を犯した」が、「はて斯うしても戒を犯すこころになる」をいふ罪のない初心から、「戒といふものは慎みの上の定りに過ぎないんだから、一々の戒法なきにこだはるほご莫迦正直ではだめだ。戒は其の本義に背きさへしなければ何んな風に方便づけても差支ない。いや本旨さへ失はなければ、平氣で犯す位の方がいゝんだ。』を自他半々にかけた申譯許りの橋をわたつて、さて、「わしらの位になれば破戒が破戒にはならないんだ。一休和尚を見ろ。』をばかり反りかへつて了ふ處へ到達するのが、持戒の行の通俗過程である。だが、本心から、「一休和尚を見ろ」を反りかへれるこころまで行ける人は少なくて、多くは似而非悟りの假面を被つて自他を瞞著するこころを犯すやうなこころになるのである。夫れほご持戒といふ行は難かしいのである。尤も、この戒が奉行できるかできないかで凡夫と菩薩との別が生ずるのだから其の筈である。實際戒は凡夫から菩薩への唯一の階梯に外ならないのだから、戒が意識を超えて活らく身心の上に生きて活ら

くこいふところまで修行しぬけるこいふには容易なものでは無い。が、そこを修行しぬけなければ、眞に甲斐ある人生をこげるこはできないのである。人間が人間になれないのである。戒は、例へば汽車の軌道のやうなものである。だから、汽車に軌道が無視されないやうに、人間には戒が無視されるものでは無い。きちんと軌道の上に乗つて居るからこそ、汽車は脱線も衝突もせずに行くところへ行けるのである。また、そんなに軌道が輻輳しても過誤が起きないのである。まして「軌道は窮屈だから」こか「古い形式だから」こか云つて、勝手の方へ飛び出すやうなそんな放埒汽車はないこ同時に「轉轍手なごに軌道を動かされて其のまゝ、其方へ「はい」こ行けるか。何うでも走り出した時の方向へ突つ走る」なご、頑張る強勢な汽車もない。汽車は常に規則通り滞りなく動いて居る。こ、である。この規則の妙用を以て、戒法圓成の法悦境はひらかるべきである。こいふのは、我

執・我見の煩惱を轉じて、萬人和合の慈悲心こする唯一の規則が戒律だからである。夫れが、天地自然の理法になつた、人間こしての本然の生活理法だからである。日が照し土が潤すこ同じ理法だからである。

次に「忍辱」である。邪見・瞋恚の不和合心を轉じて正見・圓滿の和合心を成ずるここ、これが忍辱である。さうして、そんな侮辱そんな不運をも、即ち因縁の然らしむるこころこ信受して忍耐しぬけるこいふこころから、更にまた其の侮辱、其の不運を、與へられた試験こ心得て喜んでそこを忍びぬくこころを経て、聽ては、其の侮辱、其の不運からでなければ味はひ取るここのできない妙味を味はひこつて愈よ菩提心を堅固にするこいふ過程に於て成ぜられる、これが即ち忍辱心の持ち方である。

たゞ忍耐するこいふだけでは、眞の忍辱にはならない。怒る時には大に怒り、

反抗する時には大に反抗して、さうして其の相手に忍耐の徳を知識させるのも忍辱である。自他一如の修行をして日常の茶飯事に生かす忍辱でなければ役には立たぬ。何うされても黙つて居るに甘く見くびられるやうな忍辱のはきちがへをしたら罪を作るばかりで、何んの效能もない。夫れではためである。偏頗な修行狂になられては困る。自分も練れ他人も磨けでなければ佛法の修行にはならない。これは肝腎の事である。自分獨りの修行だに考へるにこいふことは以ての外である。似而非修行なごに自惚れて世間の人が莫迦に見え出したら大變である。修行して一家の不和を招くにこいふやうな笑へぬ喜劇を演ずるが落ちである。

「勘忍の袋は常に首にかけ、破れたら縫へ破れたら縫へ」に落ち著きはらつて、日一日に怒り無き和合相の方へ進みさへすれば、自他ごにも喜びつ、努力し得る道がひらけるのである。さうである。さうして、この忍の道には、二、三、四、五、

六、十、十四に分別づけられた忍法があるけれど、要するに、自他一如の和合相を成ずる爲に、自他ごにも忍びぬくごごが本義になつて居るのだから、夫れを忘れずに精進しさへすればいゝのである。其の真心さへ失はなければ、自然に一々のごごが忍法になつて行くものである。

次に「精進」である。大は宇宙の大より小は一塵一埃の小に至るまで、細心微妙の心を以て如實に分別づけるご同時に、またその分別を超えて大小一如の大心雄偉の心を以て、分別即一如の相を如實に識得するごいふ融通無碍の心を明敏に活かかせて行くごいふが精進の本義である。さうして、萬人が各、その分に安んじて、兎かく怠けがちになる心を引き締めながら、日一日ごよりよき方途へ進展して、聽ては、過去を悔いず、現在を悦び、未來を楽しむごいふ安心境に到達するごいふのが、これが即ち精進の修行過程である。

「精進は、たゞ一途に努力することだ。猪突猛進することだ。」と似而非合點して、自他ともに迷惑するやうな向ふ見ずの事をしてぬけるほゞ單純では困る。若しお日様にそんな似而非合點をされて無やみに灼きつけられでもしたら大變である。地上の萬物は忽ち枯死して丁ふ。

眞の精進といふは、太陽が悠々照して然かも忘ることを知らないやうに、順に従つて悠々運命を開拓して行くことである。萬人和合の菩提道を粒々辛苦のためみなき努力によつて圓成することである。一生を捧げて信心法悦の圓光裡に生活することである。分に安んじて努力するといふ生活の妙趣にひたりきつて、即極樂の歡喜を一生持續することである。時計の針のやうに、一分の無理も、一秒のたゆみも無い確かさを以て悠々生活して行くことである。

次に「禪定」である。これは、梵語の禪那ぜんなをつめて禪とし、定は禪那の漢譯で

ある定法の定であるから、即ち梵漢混用の語になつて居るのである。さうして、禪那は譯されて、定、靜慮、棄惡、思惟修なご、様々な言葉で表現されるほゞ多義な言葉である。が、こゝでは主として靜慮の意味に用ゐられて居るから、夫れだけの意味で述べることにする。

萬人の心水といふものは、常に煩惱の波を漂はせて居るから、夫れで佛法眞如の月影がうつらないのだが、一度發心してその煩惱の波を鎮めれば、自然そこへ淨明な眞如の月影が如實にうつて來る。即ち宇宙萬有の如法の相が如實にうつて來る。さうすれば、其の中から萬有相の一つである人間の眞相といふものが如實に觀得される。觀得されば、自然に煩惱の波を鎮めずには居られなくなる。工夫し方便して鎮めおほせずには居られなくなる。鎮めおほせて自己即宇宙の妙諦を識得し體得して金剛不壞の座にのぼる。これが、即ち靜慮の本義である。さう

して、靜坐冥想の心水上から如何にして煩惱の波を拂ふかこいふところから出發して、更に其の心水上に如何にして宇宙を見、人間を見、自己を見るこいふ心眼が開けるかを工夫して、さうして、自己即宇宙の妙諦が、吹く風の中にも、流れる水の上にも、咲く花の姿にも、行く雲の影にも如實に觀得されるこ同時に、自他一如の和合心こいふものは、さうした花の姿や雲の影のやうに在るがま、に在り、移るがま、に移る自然さが保てさへすればい、んだこ覺解して、風の如く輕快に、水の如く悠々こ生活し得るに至るこいふのが、これが、禪定の修行過程である。

信心の一念が据わりもしないうちから、いきなり無我になるのだこ坐禪を始めたら失敗である。的なしに弓を習はうこいふやうなもので、思はぬ仕挫りを招くものである。靜坐すれば直ぐさま簇むらり起る雜念の因もとを信心によつて先づ鎮める工

夫をしてからでなければ、實際何んの役にもたつものではない。いや、却つて、頭痛持になるか、胃下垂症になるか、生悟なまさとりやになるかで、結局ごんなか病氣になるがおちである。土臺なしで家を建てるやうなものだから無理はないのである。「無」こ坐り込んだつて、「隻手の聲」こ考へ込んだつて、夫れは結局頭で考へた理窟の「無」や「隻手の聲」に過ぎないから、いざこいふ場合の役には立たない。打てば響くこいふ生きた力にはならない。「下司の後智慧」である。禪の公案を何百則そらで知つて居たつて、夫れが毎日の役に立たないやうな學者ごんでは困る。金欄緞子を澤山巻きつけたやうなもので却つてあがきがつかなくなる。公案なごこいふものは、身心一如の活らきこして證得すべきもので、理窟や機智で解釋すべきものではない。理窟で宇宙即我こいふ無我の境地を識しつたからこ云つても、口先で「無字の公案」が解けたからこ云つても、實生活裡に於ける無我がへなへ

なだつたり、靜坐中の無我が睡魔だつたりでは笑ひの役にたつばかりである。身心一如の活らきとしての「無我」は、何うしたら我執に根ざす雜念が鎮まるかといふ事を、信心の方から體驗して會得して行かない限り證得されるものではない。生きた力として身につくものではない。十二緣起の理法を信心によつて身についた活らきとして證得しない限り、この我執の雜念を鎮める法としての靜慮の德行といふものは生きて來るものではない。身心の活らきが明鏡のやうに澄みきらない限り生活の現實としての靜慮は圓成しないのである。こいふのは、靜慮は一點の私心なき淨念によつて、一切の物事の眞如相を靜思・冥慮する活らきそのものに外ならないからである。いきなり坐禪を始めて考へこむこいふやうな、そんな形式に囚はれたお手輕事では無いからである。

次に「智慧」である。これに「是非・邪正を辨別する心のはたらきである。」と説いて居るが、夫れは、「佛教は智慧を主徳とする教義である。」と單純に解釋する側の一面觀に過ぎないのである。いや夫れが普通の智慧のはたらきには相違ない。

だが、其の普通の智慧が、二智、三智、四智、五智、八智、十智、十一智、二十智、四十八智、七十七智等に階梯づけられて居る修行過程に於て順次に練磨されて行くこゝ、全く普通とは違つた活らきを現するやうになるのである。即ち理性と感情との活らきが修行によつて次第に稟性的に融和されて、何時かは超稟性的な純正さを有つた身心一如の活らきとして實生活裡に光輝づけられるこゝになるのである。知らず識らずの間に自他の別を超えて活らく萬人和合の正遍智なるのである。如何なる事情、如何なる場合にも、決して我執の影を淀ませない、眞に清淨無垢の叡智として活らくやうになるのである。さうして、自然それが自他

を利益する本有佛性の佛智として活かすことになるのである。

これが身心一如の活らきとしての智慧の本義であり修行過程である。事實、智慧の活らきから何うしたら我執の妄念を去ることができるか工夫することが修行の本旨なのである。我執の妄念さへ去り得れば、夫れで自然に自他一如の活らきが現れるからである。即ち妙融自在な正智が開発されるからである。

尚ほこの智慧については、次の坐禪の項で述べたいから、こゝではほんの概略に止めておく。

さて、これで六度の説明は了つたのだが、この六様の徳行といふものは、凡そ今迄の説明で領ける通り、されか其の一つを徹底的に工夫し精進して圓成しさへすれば、夫れで他の五つの徳行が自然に成就されるといふ微妙な關係を有つて居る修行道だから、洵に容易なやうで實は至極難かしいものになつて居るのである。

何故かといへば、その一つを修行するにも必ず他の五つのことを不斷に考慮に入れて修行しなければ、肝腎のその一つが、成就しないことになつて居るからである。

だから、この六度の修行は難かしいといふのである。迂つかりして居るこ飛んだ間違ひを惹き起す。萬人和合の徳行が、忽然に鬭争の悪行に化す懼れがある。不斷に八方へ氣を配つて精進することを忘れてはならない。布施の深切が仇になつたこと云つて怒つたり泣いたりする淺猿しい眞似は、今まで何億萬の人が繰返して來たか知れない。夫れほぎ難かしい行道である。路傍の乞食に十錢なげて好い氣持になるやうな淺はかな心根からは夢想だも許されない、深奥・無双の行道である。だからこの六度の徳行が身につくことには、何うしても禪定の修行道である坐禪によつて、先づ我見・我欲を超えて、入我・我入の無我・無相境に入定し

て、そこで體驗された無我、體驗された無相を如實に證得してからでなければならぬ。こいふ事になるのである。完全に我見・我欲を超えおほせてからでなければ、六度の徳行が生きて來ないのである。

だから、人々は坐禪の修行を始める前に、其の目的である六度が何ういふものであるかを充分に心得て置かねばならぬ事になるのである。目的を知つて其の方へ工天・精進せねばならぬのである。いや、坐禪が六度の修行方法であるこ心得て精進せねばならぬのである。精進不退の行願を以て、終には「六度萬行體中に圓かなり。」こいふ、如來禪の妙境を開發せねばならぬのである。「天地こ偕ともに吾れ悠々たり。」こいふ妙覺無等々の法悅境を開發せねばならぬのである。さうして妙融自在の遊戯相ゆげさうを現ぜねばならぬのである。

こいふ、其の法悅境ほつゑいは、實は何んの變轍へんさもない「柳は綠花は紅。」の境地であり、「この身このま、佛なり。」こ因縁まかせに安住して、晝は働き夜は眠るこいふ、其の平々凡々の境地であり、凡聖一如の境地であるこいふここになるのである。だからこそ、佛法は至妙の日用法にちようぽうとして、人生に久遠の光を通して居るのだこいへるここになるのである。

そこで、佛法を日用法にちようぽうとして護持ごぢするには、必ず、「維摩經」の「菩薩は衆生を饒益ほうやくするが故に、法を説くここきこ淨し。法を説くここきこ淨きが故に、智慧淨し。智慧淨きが故に、其の心淨し。其の心淨きが故に、一切の功德淨し。一切の功德淨きが故に、住すめる土くち又淨きなり。されば、淨土を得んこ欲せば、當まさに其の心を淨くすべし。其の心淨きに隨つて、則ち佛土亦淨し。」を日用心にちようしんさせねばならぬのである。なほこの日用の淨心を修習するには、「寶雨經」の「菩薩は道に住して、諸法の眞義を見る。眞まことは實義なり。實義じつぎは、所謂空虛くうこならざるなり。即ち眞如な

り。眞如は、自から内に證する所のものにして、文字の能く之れを施設する所にあらず。何んこなれば、眞如は一切の文字・言説及び戲論を超過するが故なり。諸の出入を離れ、分別の相あるこもなく、一切の魔境及び一切の煩惱の境界を離れて、其の自性寂靜なるが故に、垢もなく染もなく清淨微妙最上なり。常に住して動ぜず滅壞せず。若し諸の佛、世に出現するも、出現せざるも、此れは常住にして變らず。今菩薩は、諸の善男子・善女人を利益せんが爲に、勇猛精進して此れを證るなり。此れを眞如名づけ、實際名づけ、一切智名づけ、一切種智名づけ、思議すべからざるもの名づく。故に、我等が聞き、或は思ふ所の智恵を以てしては、未だ能く證り得ざるものなり。譬へば、人ありて極熱の季に曠野を行くに、彼れは、東より西に赴き、此れは、西より東に赴かんに、西より來れるもの渴きに逼られ、東より來れるものに向ひ水なきやと問はんに、即ち此

の所を去るこ遠からざる所に水あり。我れは此れを呑みて來れり。汝ち此れより東に行かんに、途の二つに分れたる所あり。左の路を捨て、右に赴かば青き山を見ん。彼の林の中に清淨なる冷水ありて能く渴を解かん。善男子等よ、今彼の渴に苦しめる人、水の名のみを聞きて、能く其の渴を醫すや否や。其の人は、内に清淨なる水を得て、然る後に其の苦を除かん。聞きしのみにては、眞如を得たるにあらず。善男子等よ、曠野は生死なり。渴は煩惱なり。路は善智識なり。自から飲むこは善巧なり。」を心して精進せねばならぬのである。

四 四禪定の證得過程

坐禪は、佛法の妙趣が何時もはなしに自然に身について來る、唯一の修行法門である。急かす怠らず信心の眞心ひみつを傾けて精進しさへすれば、誰れにでも

屹度きつとさげられるやうに工夫され按排あんばいされて居る法門である。途中で慢心したり挫折さつしたりしなければ、必ず煩惱具足の俗諦を超越こえて菩提薩埵ぼだいざつたの眞諦を妙解めうげし得るに至る法門である。だから、坐禪の道は、「普勸坐禪儀」によつて導かれるがま、に、素直な敬虔な心を以てついで行きさへすれば、夫れで、自然に我執の此岸から無我執の彼岸へ度たれる妙道である。説かれて居るのである。

然し、この妙道が、古來幾多の人々に踏み損はれて、悲喜さまざまの坐禪病に犯されて居る。こいふことは、洵に皮肉な現象ではあるまいか。形式に執して内容をよそにした、恰てうき喜劇を素すでゆく。こ云つたやうな坐禪家やお師家しけさま様が「慙いんもの時作そ麼生もさん」こか何んこか云つて反そりかへる。こいふことは、餘りに情けない。こである。だから、普通人には世界が違ふから。許り相手にされないのである。誰にも解らないやうな事を爲したり云つたりしたのは、萬人和合の佛教が萬人離背の

邪教に墮するのだから、迂こかこは寄りつけないのである。

坐禪の功德は、煩惱の心に支配されて和合しかねる偏頗な我見を抑おさへて、菩提の心なごやかに和合して行く澄正な知見を圓成させる。こころにあるのだから、其の内容をよそにして形式だけ眞似る。こいふことは、猿が冠を被かて反そりかへるやうなもので、洵あに邊あり迷惑なものである。

寂境に一炷の香を燻じて打坐する。こいへば、形だけは如何にもきちん、こ整つたものだが、さて其の心は。こいへば何度坐り直して見てもたゞ妄想ばかりむろが簇むらり立つて、何時無我の淨境が開ける。ここやら更に當てがつかない。こいふ無益な坐禪を繰り返して居る。こいふのが形式坐禪の實相である。にも拘らず、表面他人に向つては「何年間續けて居ますから」こ誇りもすれば、「まあ始めてごらんない、心を練るには一番い、方法です」こ勸めながら、裏面では、「莫迦の事を始めたものだ。

今さら止めもされないが、坐りさへすれば頭痛が始まるには閉口だ」こか、やれ「痔が疼き出す」こか、やれ「胸が苦しくなる」こかいふ意外な苦しみに悩まされて居る始末である。

だが、これはまだ正直の方で、ひざい方になるこ、坐る方はほんの人見せにしておいて、口先きや爲ぐさの方で、無やみに人を煙にまいたり困らせたりして、「悟つた者のするこは判らないよ、凡夫にはね」こばかり澄ましかへるが、實はさういふご本人にも判つて居ないこいふ、夫れは始末の悪い「野狐」が出て來るのである。

斯ういふ心の動きを眞似た方になるこ、前の軀の動きを眞似た方より餘ほご始末が悪い。いや、始末が悪いこいへば此の上にもつこ甚いのがあつて、自他ごもごもの迷惑を一生の仕事にして居るから荒じい。

夫れは、一種の「芝居師」だから、坐り方も上手なら、型の教へ方も上手で、一寸した事にも直ぐ拾ひ集めの名文句を並べて、天下のお師家様風をよそつて見せるから、誰でもつい迂かこ乗せられて了ふのである。さうして、教へる方も教へられる方も、たゞ苦しいばかりの無益坐禪を續けて、修行させた積りさせて貰つた積りのお互が、最終日に至つて内心初めてほつこ仕合ふのである。洵に面白い芝居である。が、お互に夫れでい、こ思つて居るのだから罪は無い。尤も、斯ういふ芝居は法式を極端にやかましく強ひつけるこ同時に、「人々工夫」こか「冷暖自知」こかいふ名科白を汪んに聞かせて呉れるから、偶まには眞正の禪氣を會得して歡喜する者も出て來るので、たゞ「面白くない芝居」だこもいひきれないのである。が、これは、法式や文言裡に内在する力が偶然求道者に會得されたに外ならないのだから、決してお師家様の手柄では無いのである。それは、求道

の心が法式裡に澄みさへすれば、必ず會得されるやうになつて居るのが坐禪の功德だからである。夫れが、悟りへの本然道だからである。

だから、坐禪の三昧境は、求道の信心ひこつを法式によつて澄しぬかうとする身心一如の修行者にのみ會得される境地であつて、決して目や耳だけで會得されはしないのである。

「坐禪の三昧境に入れば「柳は綠花は紅」のそのまゝ、在りのまゝ、で良いのだから、人間も煩惱具足、そのまゝ、在りのまゝ、で良い筈だ。修行なきといふ小智慧に煩はされて、無やみに雜行雜修（さいぎやうざつしゆ）をする奴は外道だ」を澄しかへられては困る。凡夫が生れたまゝ、其のまゝ、で良いのなら、古來苦行の幾多の聖者は大莫迦者である。何んの爲に生死の境まで突きつめた苦行をして來た事か、珍ぶんかんの大莫迦者である。狂人である。

が、事實は生れたまゝ、其のまゝ、では、乞食ですら生きては行けない。人間といふ生命體は、木や草や犬猫とは違ふ。生れたまゝ、其のまゝ、では絶対に生存不能である。人それぞれの世すぎには、必ず夫れぞれの修行が伴はなければならぬ。一夜漬ですら夫れにふさはしい方法と工夫とが要る。まして、人生はさうお手輕ではない。本來の面目を如實に現はして、眞に生き甲斐ある生活を遂げようといふには、先づ命がけの決心を定めねばならぬ。知らぬ間に妄執・邪見の奴となつて苦惱して居る俗心の動き方を、坐禪の修行によつて、自然に無著・正見の自在力を現じて欣悅（こんえつ）する聖心に轉化させねばならぬのだから、即ち、心の動き方を完全に一變させるのだから、死を覺悟する位（けつちやう）の勇猛心を先づ決定させねばならぬのである。「坐つて居たら其のうちに悟れるだらう」位（けつちやう）の氣では、心の動きを今までは全く反對にさせるなき、いふ大事が成しこげられるものではない。悪人を

捕へて其のうちに善人になるだらう位で放つておくやうなもので、何時までたつても變れる筈のものではない。癖くせひこつだつてさう易々やすくに變るものではない。だから、坐禪の修行に入らうといふには、必ず「大死だいし一番いちばん」して甫さめて「再活現さいくわつげん成じやう」の欣悅こんえつを得るこいふ確乎かくたる覺悟が先決されねばならぬのである。

さて、坐禪に入る眞の覺悟が熟したら、そこで「普勸坐禪儀」を何度も繰り返して味讀するのである。文字を讀むうちに文字を通して陰かげの聖氣が讀めるやうになり、聖氣の妙活が自己のうちに脈々みやくに感じられるやうになつたら、そこで初めて坐禪の實修に入る可きである。

實修の第一は、坐相であるが、「坐禪儀」の法式以外の心得こころえとしては、此の坐相が地・水・火・風・空の五輪相ごりんさうをさらねば坐定ざぢやうせぬものであるこいふこころを心得ておかねばならぬ。こいふのは、五輪は五大であるから、空大の一元相から陰陽相剋の氣がたつこころから地、水、火、風の四大の氣が生れて、夫れが終に四大和合の有相をこつた宇宙うゑうとして創成されるこいふ、彼の宇宙創成の和合相を自己のうちに如實に感應せねばならぬからである。

五輪相をこるこいふ坐定の心は、空大を頂上に感じ、風大を眉間に感じ、火大を心上に感じ、水大を臍位せゐに感じ、地大を腰下に感じて、宇宙うゑうと自己じこを一つ呼吸に通はせねばならぬのである。即ち、宇宙即我・我即宇宙の不二心を据ゑて、天地一如の大呼吸をせねばならぬのである。さうすれば、先づ感じの上で、自己の小我が宇宙の大我おほなごとして感じられるやうになつて行くからである。自己のすがたを宇宙の上へおきかへて觀るこころが出来るやうになるからである。今までこは全く反對の方から、自己のすがたを觀みなほすこころが出来るやうになるからである。これが數息觀すうそくくわんの一妙用相である。

斯うして、自己の小我を宇宙の大我の方から観なほすこいふその観じかたが熟して來るこ、そこで、自己の稟性の傾向こいふものが判つきり識得されるやうになつて「自分は如何にも理性的である」こか「感情的である」こか、若くは「其のさちらかへ片寄つては居るらしいが先づ理性的だらう」こか「感情的だらう」こか、其の性分の動き方こいふものが判つきりするやうになるのである。

で、さうなつた時に、改めて手の組み方を直すのである。即ち、理性的の人は左の手を下にし、感情的の人は右の手を下にしこいふやうに、其の性分によつて手の組み方を定めなければ、何んこしても、念・想・觀の活らきが統一されないのである。手の組み方が性に合つて居ないこ、「不思量低を思量せよ」なんて言はれたつて、不斷に紛飛する雜念・妄想の中では何んこしてもあがきがつかないのである。無念・無想にならうこ思へば思ふほぎ、却つて雜念の氣が昂ぶるこいふ

が落ちである。輪相の繼ぎ目である手の組み方が定らないうちに、何んで心の鎮めがつかう。著くはずはないのである。事實、坐相のうちで、手の組み方ほぎ大切なものは無いのである。だから、何時まで坐つても、心の鎮めがつかない人は、手の組み方を工夫すべきである。十二合掌の印相をこらなければ鎮まらない人もあれば、十六觀の印相をこらなければ鎮まらない人もあるこ云ふやうに、人各の氣根・身根の別によつて、自然に手の組み方が違ふやうになるのだから、その工夫が肝要になるのである。が、これは、達道の師家について工夫せねば容易に定まるものではないから、十二合掌、十六觀等の印相のここは遠慮しておくここにする。

が、兎にかく斯うした審細の工夫によつて手の組み方が定まるこ、そこで初めて五大の輪相が整つて、小宇宙としての本有の生命活相が顯現するここになるの

である。然もこれは、其の個體を以ての中正がされた相では無く、逆萬字の空相に對する順萬字の色相を以ての中正がされたことになるのである。即ち、色の鏡へ空の無相の相を寫して見るここが出来るやうになるのである。こゝが、坐禪の三昧境に入る初門である。即ち、四禪中の初禪の氣が、初めて身心の上に行きわたるやうになつたところである。

この初禪の氣を身心の上に如實に感じるこゝは容易なものでは無い。素直な信心の氣ひを以て傾けて、坐禪儀によつて身心を澄まして行くに當つても、餘り法式を重くしりすぎて、蛇を竹筒へ入れたやうに反りかへつて了ふこゝ、平生を以て餘りかけはなれた姿勢になつて方々に無理なところが出来て苦しくなるから、其の爲に心が亂れたり、また、「たゞ、ぼかん、坐つて居れば、夫れで案外やすやす無の氣が澄んで来る」云はれて、午睡でもするやうな心持でついで、こゝを以て了ふこゝいふやうに、固くなつても伸んびりしても横道へそれて、なかなか本道につけないものである。で、寧ろ、こゝを以て全身を反らしておいて下腹に力を込めながら、すぼつ、こ腰をおさせば、夫れが、恰う二・三歳頃の兒どもの姿勢と同じになるから、さうした心持で姿勢を定めるこゝ、自然に全身が樂におちつくやうになる。これが一番無理のない姿勢のやうである。足も結跏が無理なら、男は半跏、女は正坐がいゝ。其の方が早く据りがつくやうである。竟り成るべく無理の行かないやうにして、然も夫れが法式にはづれない程度の工夫をするこゝが一番順當のやうである。

斯ういふ風に、軀の方は裕にしておいて、心の方を出るだけきつ、こ締めるのである。我慢や見榮や慾で行く坐禪でなく、自己のうちに法性を顯現させたいこゝを以て命をかけた坐禪だからには、そこに一點の不純さを留めない淨明な信心が

傾けられねばならぬのである。だが、さうした眞剣さを心頭に集めれば集めるほど、「煩惱の犬」が荒じい勢で信心の氣ひみつを目掛けて執念深く飛びか、つて來るのである。けれども、この荒じいこそ、色の世界に於ける輪相そのもの、活相に外ならないのだから、夫れが、色身そのもの、本有活相に外ならないのだから、何んぞ工夫しても拂ひ去れる筈がないのである。夫れは、火で火が消せず、水で水が乾かせぬと同じ理だからである。

そこで、初禪の境地に於ては、散亂極りない色の氣を、例へば首の座に坐した武士のやうにぐい、こ引き締めて、眉ひこつ動かさないこいふ、其の雄々しさを心こする位の悲壯さを以て、凜嚴不壞りんごんふぶの心地を開かねばならぬのである。さうして、其の悲壯な覺悟が完全についたところが、夫れが初禪境である。

初禪に於て据つた凜嚴不壞の氣が、漸く熱して來るところが二禪の境地である。こ、では、身心の痛苦が次第に癱痺傾向をこつて、例へば、痛苦する自分の外にそれを微かに感じて居る最う一人の自分こいふものがあつて、煩惱具足のあらゆる醜態をつくして居るこころを眺めやつて居るやうな不思議な二重意識が活らくやうになるのである。ついで味はつた事の無い、夫れは妙な氣持になつて來るのである。色相裡に於ける自分こいふもの、すがたが漸く判つきり見えるやうな氣持になり、妄想の動きがずつこ間遠になつて來るのである。さうして、自分すら意外に思ふやうな事が、薄雲のやうにちらちら、こ影を落して行くのである。こ、が、白隱禪師の「三年前に隣から借りた豆の事をふつこ思ひ出した、忘れた」こいふこころである。

順當に來れば斯うなつて、こ、から愈よ臙ろな氣持になつて三禪に入るのだが、我慢や見榮や慾とする者はこ、で脆く破れて、すたこら後お戻りして了ふのであ

る。さうして、一生色相裡の煩惱即煩惱の輪相に縛りつけられて居ながら、恰好や口先だけで自他を胡麻化して行くのである。切ない因縁を受けて来たものである。さうして、居眠り坐禪、横丁坐禪の妄想禪鼻を偉らさうに振り廻すから、だから「禪天魔」を罵倒されるのである。形だけ真似て心がおろそかになつて居るのである。自他共難儀のはなしである。最初の心がけが間違つてこんな事になる。中途では容易に取り返しがつかぬものである。戒心すべきである。こゝが、慾界から色界に轉じ得るや否やの境になるのである。

次に三禪の境地であるが、こゝでは身心の痛苦が愈よ癱痺して來て、何うしようといふ氣力も無い重苦しさに押しつけられて全く觀念させられて了ふのである。こゝが、慾界から色界に轉じた相である。さうして、夫れは例へば、拗ね損ね

た兒ごもが泣き疲れてぐつたり身を投げ出したまゝ、眠て了ふといふやうな状態になるのである。だが、そこには、信心の一念を凝らして煩惱を坐斷しようといふ不壞の心願が「萬里一條の鐵」にして嚴そかに通つて居るから、空しく昏沈・疲睡するやうな事にはならないのである。尤も、そこまで張り詰めた事の無い心氣の悲しさで、ついゝろゝゝ昏沈して行く自分といふものゝ、夫れを見て「あれよ」を思ひながら何うすることも出来ない自分といふものゝが、たわいなく纏れ伏して危く正體を失ひかけてはまたはつゝするといふ際といふころまで行くのである。こゝが大事である。こゝで四禪の正定境が開けるか魔境に墮ちるか、決定するのである。身心一如の痛苦が極まつて、一轉妙覺の勝縁を得るか、忽然魔障の惡縁に牽かれるか、其の人の因縁によつて決定するのである。即ち、色界から無色界に轉ずるか轉じ得ずに留まるか、決定するこゝになるのである。

勝れた因縁をうけて来た人は、この瀬戸際で「よしこ、だ」いふ大死一番の勇猛心が奮ふるひ起せるから、それで瞬間は、つゞき開ける光明界を身うちに現あらわすることが出るのである。即ち、色相裡に於ける順萬字の五輪相が、忽然として空相裡に於ける逆萬字の五輪相に轉ずるのである。色即是空の妙境が、瞬間は、つゞき開けて來るのである。

この妙境は、身心一如の痛苦を極めぬ限り絶対に開けるものではないのである。いふのは、空相から發した陰陽・四大の氣がその生命運動である逆萬字の活らきを高めて、そこに眼に見えぬ物としての和合相を現じはじめると、夫れを轉機として無相に入り、さうして、其の和合相が熟しきると、そこで今までの左轉運動がびたり止まつて、今度は其の反動力による右轉運動が始まり、その活らきによつて眼に見えぬ物の和合相が眼に見える物と成る順萬字相をこりきると、夫れ

を轉機として有相に入り、そこではじめて色相をこつて存在する物象を成ずるといふ、この色相の生命過程を逆に溯源せねばならぬからである。即ち、有から無へ無から空へと、坐禪の定力によつて溯源させて、その空の活らきを直ちに有の活らきとするやうに置き換へて、そこに無色界といふ特殊の世界をつくり出さねばならぬからである。だから、其の苦しみが、當然右轉の氣を殺して左轉の氣に活かし直すといふ生死一如のものにならねば、忽然轉悟の妙機は證得されないのである。斯ういへば酷ひどく難かしくなるが、例へば流水の活らきが逆になること、其の逆がそのまゝ、水垢ぼうごや子子こごの順になつて了ふやうに、空から發した逆萬字の氣が逆になること、其の逆がそのまゝ、順になつて順萬字の色としての物が創成されて來るのだから、この順逆の機微を身心一如の痛苦の中から捕へるといふことが大事で、これさへ捕へ得れば苦もなく轉悟し得ることになるのである。難かしさうに見える

綱渡りだつて、一度その機微を捕へさへすれば後は苦もなく渡れるのだから、何うしたら其の機微が捕へ得られるか、工夫の爲しころこいふものである。工夫こ言ふのは右轉する順萬字の活らきを生命こするこの身心の活らきを左轉する逆萬字の活らきを生命こする大宇宙の活らきに轉じる方法を工夫するのだから、竟り痛苦を極めるのが轉換の機契だこ知つて工夫すれば案外樂に行くのである。

尤も世間萬人の中には、因縁が悪くて絶対に悟れないこいふ人もあるのだから、十人十色の因縁が十色の工夫によつて一樣の悟りを得る、即ち差別の色相裡に無差別の空相を顯現させるこいふには、結局佛菩薩に此の身をさげきるこいふ信心ひこつを傾けて精進せねばならぬこになるのである。一分の緩ゆるみもなく精進する、其の氣からでなければ眞の悟境こいふものは開けて來ないのである。いやこ、は精進の自力ばかりではなく、信心の他力がそこへびたり、合致せねば成ぜられぬのだから、其の妙融力をたのみ素直さが自然にもてるやうでなければならぬのである。

さて、開悟の様子であるが、前述の昏沈・疲睡の氣が愈よ迫りくるこ、そこへふうつこ不思議な氣の動きが感じられて來る。これが大宇宙の氣である。其の氣が先づ上丹田に感じられ上丹田から中丹田に傳はり、中丹田から下丹田に溜るこそれが、組み合せた手に痺れしびれこは全く違ふ異様な微動を傳へるやうになるのである。こ、夫れまで漫然こ散亂して居た心氣が急に澄み出して、昏沈・疲睡の彼方へ張り詰めた精進の氣をくつこ突き進めずには居られないやうになるのである。夫れは不思議な力が、何處か底の方からむくむくこ動き出して來るのである。これが、勝れた因縁に潜められた力である。本有佛性の力である。

この力が動き出すこ同時に夫れまで唯だぼうこした感じの中に痲痺して居たや

うな全身が、急にひやつ、こ来る冷氣にひたされて軽く慄へ出すのである。こ、忽ちまた、氷のやうな荒^{すさま}じい冷氣が脊筋を突つ走るかと思ふ間に、夫れがさつ、こ擴がつて全身をこちん、こ氷らせて了うのである。ほんの一瞬間にである。さうして、瞬きひみつ、指一本動かせないやうにして了ふのである。これが順萬字の活らきが死のすがたを現じたところである。

するこ、そこへまた、不思議な溫氣がぼうつ、こか、つて来るのである。氷りきつた軀の中でもなければ外でもないこいふやうな、夫れは妙な感じを湛へた溫氣がほのかにかよつて来るのである。さうして、夫れが忽ち全身をふつ、こり、溫めて呉れるのである。何んこもいひやうのない柔^{やは}らかさで、夢のやうに身心を包んで呉れるのである。これが順萬字の活らきが死相を超えて逆萬字の活相を現じたところである。

さうなるこ、今まで張り詰めて居た氣持が苦もなく緩んで、急に如何にも伸びりした氣持になるのである。こ、ではじめて、空大の氣が自分の上へ脈々こ通つて来て居るこいふここが識得されるのである。こ、が、一休禪師の「有漏路^{うろうち}より無漏路に通ふ一こ休み雨ふらば降れ風ふかば吹け」の玄妙境になるのである。こ、からが、道元禪師の「是れ安樂の法門なり」こ仰有られた境地になるのである。だから、こ、が、轉迷開悟^{てんめいかいご}の機契^{きけい}であり、生死一如の妙融境であり、順逆萬字の轉換境^{てんくわんせやう}であり眞の無我境であるこいふここになるのである。いや、その如實相が、身心一如の活らきの上の現實として、こ、で明確に證得されるここになるのである。さうして、我等人類未生前の父母の面目こいふものが、脈々こ通つて来る空大の氣から如實に感じられるやうになるのである。「やみの夜に啼かぬ鳥の聲きけば牛れぬささきの父ぞ戀しき」こいふ、其の玄妙な三昧相が如實に感じ

られる法悦境がひらけるのである。こゝで信心に金剛不壞の眞の据りがつくのである。

だが、こゝはまだ、樂になれたこいふだけの境地に過ぎないのだから、有の如相も空の如相もまざまざと感得されはするが、夫れは例へば、山の頂から遙かに兩相を見おろして居るやうなもので、さちらへも身心の活らきが及ぼせないのである。けれども、其の動きの無いこいふこゝが少しも苦にならないのだから、夫れは恰うご鏡のやうなもので、物が映れば寫つたまゝ、消えれば消えたまゝ、でそこに何んの變相も起さないこいふすがたなのである。たゞ茫乎とした安樂さにひたりきつて居るこいふ「無」になりきつたすがたなのである。

だから、迂かうかこして若しこの安樂さに著して了へば、無爲無欲の死禪に墮して、生き甲斐なき無益の座を守るやうになるのである。こいふのは「無」の境地

が開けた許りでは未だ有の氣の方へ引かれ易いからである。が然し、こゝまで來られるやうな勝れた因縁の人々になれば、殆んど一様に、その安樂さの中から自然に澄みのぼつて來る、精進不退の氣に動かされて四禪境を開くが常なるのである。こいふのは上丹田に感じた空の氣が組み合せた手に微動を傳へた時が、夫れが身うちの五輪相に空の氣が行きわたつたこゝろであり、夫れから、その空の氣が安樂感を伴つて身うちに熱しきるこゝ、それが精進不退の氣となつて動きだすこいふこゝになつて居るからである。さうして、この精進不退の氣の起きたこゝろが、これが、慾・色の二相から完全に離れて無色相の四禪境に轉じたこゝろになるのである。だから、此の境地が開けて來るすがたこいふものは、例へば、長閑な眼ざめから次第に清々しく身うちに通つて來る朝の氣を感じてすつく、床をはなれるこいふやうな、さうした朗らかさこゝ力強さに満たされて開けるものなの

である。

斯うして開けて來た四禪の境地さいふものは、常に朗らかさこ力強さこに満たされた精進不退の氣の世界さなるのである。慾・色の二相を離れた無色相の氣が、寂然さ坐定した有の身相を離れて、無を超えた空の氣さして、有・無・空の如相を自在に感じて、差別即無差別の妙諦を知識するやうになるのである。

こゝで、さういふ微妙な活らきをもつ智慧の眼が、例へば彼の蓮華のやうに成り成つてば、つゝ開くこゝになるのである。即ち、戒・定・慧の慧眼が、忽然さ開發するのである。だから、この慧眼は、いふまでもなく、身心の活らきを戒法通りに整へてびたり、五輪相をこつたこゝろから、更に定法通りに進めて生死の一如相を現じたこゝろを経て來たものであるが故に、決して曇りも晦まされもしない不壞の鏡智さして活らくこゝになるのである。

事實この慧眼は、有・無・空に互る一切の物象を在るがま、に見、動くがま、に感じて、更に過ちも著しもしない鏡智ではあるが、何分まだ開發したばかりのものであるが故に、唯だ能く見、能く感じて、その在り方、動き方を因縁果の上から宇宙的に知悉し得るさいふだけに止まるのである。即ち、純客觀力さしての活きを得ただけのこゝで、夫れ以上の妙融力はまだすこしも出て居ないのである。

然し、今まで夢想も及ばなかつた、有・無・空の如相が一如の生命現象さして如々に知悉されるやうになつたのだから、夫れは例へば、待ちまうけた雲海の果てに忽然さ閃めきたつ一條の黎光を見出して叫ぶさいふやうな其の歡喜を超えて、更に見るみる鮮やかに明けはなれて來る天地一枚の眼界を一瞬のうちにあつめたさいふやうな素晴らしい歡喜感が、むくむく、さ身うちに盛りあがつて來るのである。法悅の涙が胸をついては、ふりおちるのである。さうして、こゝから忽然さ立

つ精進勇猛の心柱がすつく、天をついて樹つやうになるこ、そこへ早くも次の境地が感じられて來るのである。

さて、これで、初地しよぢの菩薩境である四禪定の證得過程は終つたのであるが、終に一言そへておきたいことは、愛欲から發する煩惱を轉じて慈悲の功德を布く菩提を成ずるのが坐禪であるからには、勿論愛欲は坐斷され了るには相違ないが、さて實證による修行道からすれば、發心以前に愛欲の根本的一現象である戀愛業れんあいごふに溺れて、其の精根を徒らに荒すさばせた人ひとか、發心後にも戀愛的な著心ちやくしんに禍わざはひされ易い人ひとといふものは、坐禪修行裡に於ける「いざ」といふ場合に脆もろくも落伍するといふ、洵に残念な事情が潜んで居るから、先づそこに眞劍の求道心を傾けて貫ひたいと思ふのである。こいふのは、煩惱即菩提ぼんごうじつぼつじといふ妙融法の根本義からすれば、煩惱の根も菩提の根も全く不二一如の生命力であつて、夫れがたゞ色相の順萬字

相をこつて現ずれば煩惱ぼんごうこなり、空相の逆萬字相をこつて現ずれば菩提ぼつじこなるこいふ、その活現相上の相違に過ぎないからである。如何に轉じようこしても、其の性根が煩惱の爲めに衰へて了へば菩提に轉じ得ないからである。こいふのはこれが「毒藥變じて藥くすりこなる」の義に外ならないからである。だから、戒法に於ても、不邪淫戒ふじやえんかいが殊まじかに嚴まじかしくされて居るのである。慎つとしむ可きは染著の心である。

だから、「起信論」では、修行時に於ける著心ちやくしんを説いて、「人もし唯だ止とどのみを修すれば、則ち心沈没し、或は懈怠けたいを起して、衆善を樂ねがはず、大悲を遠離す。是の故に觀くわんを修す。觀を修すれば、當に、一切世間の有爲法うゐほうは、久しばらくも停とどり得るここなく、須臾しゆゐんに變壞へんわいし、一切の心行は念々に生滅すれば、是の故に苦なるここを觀くわんずべし。應たふに、過去に念ねんぜる所の諸法は、恍惚たうこつこして夢の如きを觀くわんずべく、應たふに、現在に念ねんずる所の諸法は、猶ほ電光の如きを觀くわんずべく、應たふに、未來に念ねんずる所の

諸法は、雲の忽爾こつにとして起るが如きを觀すべく、應に、世間の一切の有身は、悉く皆な不淨にして、種々の穢汚まじ。一として樂しむべき無きを觀すべし。當まさに是の如く念すべし。一切の衆生は、無始世より皆な無明むみやうに熾習くんじふせらるに因るが故に心をして生滅せしむ。已すでに一切の身心の大苦を受くれば、現在即ち無量の逼迫ひつぱくあり。未來の苦しむ所もまた分齊ぶんさいなし。捨て難く離れ難くして覺知せず。衆生は是の如く甚だ愍あはれむ可しこ爲す。此の思惟しゆいを作して即ち應に勇猛の大誓願を立つべし。願はくは、我が心をして分別を離れしむるが故に、編あまねく十方に於て、一切の諸善徳を修行し、其の未來を盡し、無量の方便を以て、一切の苦惱の衆生を救拔くばつし、涅槃第一義の樂を得せしめんこ。是の如き願を起すを以ての故に、一切の時、一切の處に於て、己れが堪能かんのうするに隨つて有らゆる衆善しゆぜんを修學するを捨てざれば心に懈怠なし。唯だ坐する時、止を專念するを除く。若し餘の一切に於ては、悉く

當に應作こ不應作こを觀察すべし。行・住・坐・臥、皆な應に止こ觀こを俱ともに行ずべし。所謂、諸法の自性は不生なりこ念こずこ雖も、而かもまた、即ち因縁の和合する善惡の業、苦樂等の報は、失せず壞なせずこ念こずべし。因縁善惡の業報ごつぽうを念ずこ雖も、而かもまた、即ち不可得なりこ念こずべし。若し止を修すれば、凡夫の世間に住著するを對治たいぢし、能く二乗の怯弱こにやくの見を捨しやすべく、若し觀を修すれば、二乗の大悲を起おこさる狡劣けふれつの心過を對治し、凡夫の善根ぜんこんを修せざるを遠離すべし。是の義を以ての故に、是の止こ觀この二門は、共に相助成して相捨離せざるなり。若し止觀具ぐせざれば、則ち能く菩提の道に入るここなし。』こいつて居るのである。

五 無想定と精進修行の願心

四禪の定境ぢやうきやうが圓成まんじやうすれば、そこへ當然しんじやう四空の定境ぢやうきやうが開けて來る筈である。

だが此の四禪の定境と四空の定境といふものは、眼に見える物の世界である色界から、眼に見えない力の世界である無色界へ轉換して行く其の變り目になつて居るから、こゝを無難に通るぬけるといふことは、甚しく難かしいことになるのである。春から夏への變り目ですら、兎かく身心の上に故障が起り易いのである。この色界から無色界への關門を通り抜けようといふ一大修行の爲めには、實に容易ならぬ覺悟が在るのである。

こいふのは、第四禪の定に据わりがつくこと、そこへ早くも、欲界・色界・無色界に互る一切の物象が、三界一如の相をこつてちらちら見えやうになつて來るから、ついふらふら幻感されて、「是れが涅槃の寂境だ」と思ひ込んで貪著する懼れがあるからである。年來思慕して來た即心是佛の涅槃境が、まさまざ目前に開顯したのだと思ひこんで、何の節度もなく陶醉する魔境に墮し了る懼れがあるからである。

大事の岐路である。

第四禪の境地こいふものでは、まだまだ、戒・定・慧の慧眼が開けたこいふだけのもので、決して方便自在に三界を照破するこいふやうな妙融力が得られた譯ではないのだから、従つて、その慧眼に映つた涅槃境こいふものも、僅かに影を映じたに過ぎない幻相であるこいふことになるのである。

ところが、さうした未熟さには夢さら氣づかず、一途に涅槃に入れたものだと思ひ込んで、そこで、ごつかご安心の腰を据ゑるから、夫れで無想定に墮ちるやうな不覺をこるこことになるのである。

無想定こいふのは、第四禪定に依り心そのもの、活らきを完全に寂定し了るこ、そこへ無爲恒常の無念無想境が開顯して來るのだが、そこを直ちに涅槃境こ心得

て何時までも枯木死灰のやうな無爲の座を守つて非色非心の法を修するやうになる外道定である。さうして、この定を修したものは、その果報として、死後五百大劫のあひだ無想天に住して、常に夢見て居るやうな無爲安穩の寂靜にひたつて居られるといふので、その安穩さを思慕する外道のみが修する特殊定になつて居るのである。

尤も、この定は、佛教の内道修行をして居る者の上へも、色界から無色界へ轉ずる時の一時的な必然現象として現はれる中間定になつて居るから、其の點で、四空定後の無色界から法界へ轉ずる時の滅盡定と並べられて二無心定と呼ばれる難定になつて居るのである。

事實、この無想定中の安穩さといふものは、恰うごおつこり霞の中へこけこんだやうなもので、たゞ陶然として了ふのであるが、そこへ然かも、常々思慕し念願して居るごころの三界一如の涅槃相や佛相・人相なきがちらちら見え来て來るから堪らないのである。神通自在の法力を得て現身に成佛したのだご自惚れずには居られないやうな諸相が、何んの苦もなく目先へ現はれて來るから困るのである。

だから、つい著心を起して囚はれて了ふやうなごころになるのである。さうして「佛にあはゞ佛をころし、父母にあはゞ父母をころせ」ごまで嚴戒されて居るごころなきは完全に忘れはて、たゞ譯もなく目先の幻想に魅惑されて了ふやうなごころになるのである。

これが、無想定中の實相である。

禪定修行中に、斯うした中間定境が出て來るごころは、身心の活らきが過渡的な片寄りを生ずるからである。

そんなら、何うしてさういふ片寄りが生ずるのかさいへば、身の修行さいふものが常に心の修行より一步おくれることになつて居るからである。身心が、常に一如の活らきを現するやうに並行して進むやうになつて居ればいゝのだが、本来の性能さいふものが、さうなつて居ないから、夫れで、片寄りが生ずるさいふことになつて居るのである。

だから、禪定修行が難かしいものになるのである。

本来の意義からすれば、禪定修行さいふものは、當然身心一如の修行であるには相違ないが、修行の實際からすれば、身の方が心より一步おくれるさいふ過程をこるやうになつて居るから、其の爲めに種々の障りが生ずることになるのである。

一つの癖ですらさうで、はつきりさうさ氣づいて直さうさ心掛けても、さてな

かなか巧ましく行かない。迂^まつかりすれば直ぐ出て了ふ。何度くりかへしても「あつ、また」である。斯うして、半年・一年さいふやうに根氣よく心掛けて、夫れで漸く、何時さいはなしに直つて居るさいふ次第である。

このやうに、禪定の修行過程に於てもまた、大體の傾向さしては、色界の四禪定に於て心を修め、無色界の四空定に於て身を修めるさいふ過程をこることになるのである。だから、禪定さいふ言葉にしても、一般的に、禪さいふは、思惟^{しゆい}修さか靜慮^{じやうりよ}さか譯されて、散動する心を修める方に用ゐられ、定さいふは、梵語^{ぼんご}の三摩地^{さんまぢ}のここで、禪によつて修めた心を以て身を修める方に用ゐられるさいふやうに分別づけられて居るのである。が、これは、白さ黒さいふやうに判つきりして居るものを分別したのでは無く、内的な活らきの上から傾向的に見て假に分別つけたに過ぎないのだから、その微妙な關係を見おこしてはならないのである。

だから、禪宗では、この微妙な關係を常に不即不離ふそくふりのま、妙用させるやうな修行過程をこらせる爲めに、禪ぜんといひ定ぢやうといふは、色界・無色界の修行を圓成させたころへ開けて來る涅槃の妙心、即ち佛心のここに外ならないから、坐禪裡の心頭には常にこの妙融自在の佛心を感じて居なければならぬ。教へて居るのである。禪ぜんか定ぢやうか、四禪定しぜんぢやうか四空定しくうぢやうかといふやうに分別づけておくこ、その一々の階段に囚はれて、「それ初禪を成じた、それ二禪を成じた」と言つて、其の喜びの爲めに慢心するおそれ懼があるから、さうした慢心の種になるやうなしをりはつけない。ここに居るのである。が、さうした禪宗でも、「一刻坐禪すれば一刻の佛である」なき、いふ言葉を鵜呑みにして、欲界から一步も出た事の無い未熟者が「坐りさへすれば佛ぶつと同等になれるのだ」と定ぢやうめこんで、修行なき成道じやうだうの妄信を以て安逸を貪るこいふ耻なき不心得者が、輩出する始末だから油斷がならないのである。

何んこ工夫しても囚はれて了ふこいふのが欲界のゆきかたである。だから執著を離れるこいふこは、修行によつて欲界を離脱するより外に道は無いのである。

ところが、此の欲界に於ける執著の餘習よじゆといふものが、欲界を超えた色界の修行によつても未だこりきれず残存して、其の爲めに無想定に囚はれるこいふ不覺をこるこになるのである。尤も、この餘習は、無色界の四空定を成じても未だ残存して、其の爲めに滅盡定に囚はれる懼れがあるのだから怖おそしいのである。心が空にぬけても、未だこ身には習氣じつがが残つて居るこいふ譯になるのである。難たいかなである。

こ、いふのは、心の方は最初から色界に屬する形をこつて居るから案外順潮に空にぬけやすいが、身の方は終始一貫して欲界を離れ得ぬ形をこつて居るから何

んとして空にぬけきれないといふ本有的な相違を有つて居るからである。出来方が最初からさうなつて居るからである。同じ系統に屬して居ながら一方は風といふ形をこり一方は水といふ形をこるに同じだからである。

斯ういふ本來の因縁を有つて居る身心心の活らきを妙融自在に活らかせるころまで修行しぬけようといふのだから容易では無いのである。だから、生死の彼岸へ工夫しぬけろといふのである。欲界に屬するこの身をころしてか、れといふのである。

四禪の境地を修得した時、はじめてこ、の機微がはつきり會得されるのである。こ、まで來なければ、身心心の活らき方が判つきり會得されないのである。が、會得してはじめて工夫の方法が立つのだから、四禪定だけで佛道が成ぜられる筈は無いのである。進んで四空定の修行に入らねばならないのである。夫れを、四

禪定から無想定に入つたところで、その中間の安易さに囚はれて腰かける懼があるから油斷ができないといふのである。

斯ういふ風で「煩惱の犬追へきも去らず」三といふ厄介至極な心の活らきより最上一層厄介な活らきを本有して居るのが身であるといふことになるのである。事實、形を變へなければ、即ち死な、ければ眞空清淨の涅槃境へ出るこが出来ないといふ厄介な因縁を欲界に結ばれて居る身ではあるが、一面また、何んとしても欲界から抜けられないといふこの因縁があればこそ、欲界・色界・無色界の異相を三界一如の妙融相として身心一如の活らきの上に顯現するこが出来るといふ功德が受けられるこになるのである。さうして、其の三界一如の妙融相が身心一如の活らきとなりきつたころが、即ち正覺境・涅槃境といふものになるのだから、その妙融の機微を會得しえすれば、即ち悟りえすれば、夫れで煩惱即

菩提といふ方便力が出て來るのである。欲界に居て欲界が苦にならなくなる、煩惱があつて煩惱に囚はれない、竟り「清濁併せ呑む」大海の廣さが「胎中たいちゆうにまごかなり」まごといふこゝになるから、この欲界といふ地獄がそのまゝ、極樂淨土になるのである。形を變へずに其のまゝ、淨化して了ふのだから、時に應じて凡こも聖こもなり得て滯らない變通力が自然に發露するやうになるのである。蓮はらすが泥中に根を据ゑて居るやうに、欲界に根を据ゑた身からすつく、信心の莖くきを立て、やがて色界・無色界の上へ抜けて咲く妙華を、黎風かづねんに憂然うれんと咲く蓮華のやうに開顯するこゝができるのである。だが、この法悦の妙境は、四空定・滅盡定・金剛喻定等の定境が「胎中まごか」に圓成した時に描き出される眞如の一圓相に外ならないのだから、其の一圓相の根が身に深く潜められて居るからこゝいつて、無やみに安心の腰を据ゑるこゝはできないのである。磨かねば玉の光は開顯せぬものである。

夫れを、身は欲界・心は無色界と隔つたその中途の無相定あたりで無やみに安心の腰を据ゑたがるから、だから不覺の足をふらふら、外道へ踏み出すやうなこゝになるのである。身と心との歩あゆみが常に不二一如に運ばれるものなら、決して中途で外道へ踏みはずすやうな不覺はこららないのだが、さう都合よく生れついて居ないが人間の本有相だから困るのである。だから、難かしいこゝになるのである。

斯うした事情によつて無想定といふ過渡期の變相が顯現するのだが、心の活らきが、まだまだ其の機微を知つて善處するだけになつて居ないから、だから身に染みじみ感じられる其の安逸さに囚はれて、「こゝが涅槃の妙境だ」こゝと貪著して了ふこゝになるのである。身に殘る著の氣に縛ばくされて、何んこしてもその陶醉境からぬけだすこゝが出来ないのである。だから、世の煩わづらさ、を無やみに嫌つて、人

里はなれた寂境ばかり思慕する變人・奇人となり果てるやうなことになるのである。生きた屍しかばねとなりすたれて、全く物の役にたゝなくなるのである。萬人和合の大悲心を養はうとする佛道に於て、萬人忌避の利己心を養ふといふことになるのである。これほご始末の悪い我執が何處にあらう。夢にも他人の事が思へないといふのだから、當まさに外道である。いや、完全に我執のこれた生活が佛道に歸依した生活で、何處かに我執の餘習が残つて居るといふだけでも夫れは既に外道の生活なんだから、これは當に外道の外道でなければならぬのである。夫れは、煩惱具足の利己生活より尙ほ悪い利己の徹底境だからである。修行を生活から離して、煩惱による一種の遊戯として了ふから斯ういふことになるのである。生きた御法を、言葉や行爲の方から形式的に鵜呑みにして著心でころして了ふから、だから、無いには劣る死法になつて了ふのである。淺猿しいここの極みである。

佛法は、天地自然の理法を人間の上に開發させる自然法に外ならないのだから、信心の眞心を傾けて修行しさへすれば、必ず萬億川を吞却どんきやくして洋々たる風光を展べる大海の如き和合相を成ずることができるのである。其の佛法が、死法じぽうとなり邪法じやぽうなるといふのは、我執の煩惱を轉じて萬人和合の菩提心ぼつじしんを成じようとする願心が徹底して居ないからである。だから、途中で退轉したり慢心したりするやうなことになるのである。無想定に於て殊にさうなりやすいから、こゝで一層願心を引きしめる工夫が必要になるといふ譯なのである。でなければ、茫乎ぼうことして方處を絶した四空定に入るこゝができないのである。

茫乎ぼうことして據りよこころもなく當てもなく捕へとこころもないといふ方處ほうじよを超えた無色界へ伸び立つて來るこいふには何ういふ工夫があるかこいへば、色界しきかいこいふ形を對照たいしやうした四禪定の修行が何んな過程をこつて來たかをふりかへるこ同時に、

第四禪定から無想定への過程に、無想定に於ける非色・非心法の本義を味識して、そこで精進修行の願心ひみつを無方處の世界へすつく立てずには居られない氣魄の動きを捕へるのである。さうである、身も心も、たゞ茫乎とした感じの中にうかべられて、今は何うしようといふ氣も起らなければ、従つて指一本の處在すらたゞ遙かなものに思はれて、よし動かさうとしても動かない、自分で自分の指一本が動かないといふところに居ながら、その夢見ご、ちなごころが嬉しくて自然に、ころ、融けこんで了はずには居られない、即ち有想に非ず無想にも非ずといふ、たゞ臆ろな感じ一つに著したがる懼れがあるから、その臆ろな著心を「佛にあは、佛をころせ」の氣魄によつて滅除する工夫をせねばならぬのである。愛著のきづなを断たねばならぬのである。即ち、工夫は愛著のきづなを断つ勇猛心を奮起させることである。目前の情をころして永遠の情を生かすことである。小

我をころして大我を生かすことである。ころすといふは轉生させること、轉生させるといふは反物を着物にすること、形を變へることに外ならないのである。

それから、色界といふ形を對照した世界から、無色界といふ形なく對照なき世界へ轉生するといふには、今までの對照による相對の修行を對照なき絕對の修行に轉じなければならぬのだから、今までの外に向けて來た心眼を内に向けなければ、無方處に處すといふ心の据ゑごころが定らないのである。今までは對照といふ鏡に自己のすがたを寫して修行して來たのだからまだまだ樂だつた。が、今度は、自己を鏡として自己の修行をしなければならぬ。即ち、絕對境に於ける不二一如の修行をしなければならぬといふのだから、今までは全く勝手の違つた修行をしなければならぬのだから難かしいのである。

そこで、修行の願心といふものを鏡として身に殘る餘習を徹底的に寫し出すこ

いふ相對にして絶對・絶對にして相對こいふ身心不二一如の修行方法を稟性的に創定する工夫をせねばならぬのである。夫れは例へば、自己の見識によつて自己を修おさめて行くこいふやうにである。さうすれば、直接他人に據よるこいふ必要が無い譯だから、竟つり無方處廣大の世界を獨往どくわうするこいふ行き方の妙機が會得されるであらう。煩わづはしい人生に處して滞りも煩わづはされもせぬこいふ妙機がである。即ち「獨往の妙趣こ、に發露す」である。

こ、である。だが是れ以上言へば愚痴になる。いや、既に愚痴百萬遍、無役の言、徒いたづらに迷ひの種こなる。不是々々。

雲門宗の開祖、雲門文偃うんもんぶんえん禪師が、或る年の釋尊降誕會しやくそんかうたんゑに大覺寺の法堂に上堂されて、きつこ大衆の上に眼を据すゑられるが早いか、

「十五日いぜん己前は汝に問はず、十五日己後の一句を道いひ將もち來れ。」こ言ひ放たれ

たものである。だが、その「十五日」こいふころに何どんな事が隠かくされて居るのか、一寸誰にも見當がつかかねた。雲門門下うんもんもんげ濟さい々の多士たし等にも、十五日以前が止とで、以後が觀くわんだこいふのか、止と觀くわんが圓融せぬが以前で、圓融したが以後だこいふのか、さて迂うつかり口が開けなかつた。彼等は、思はず顔を見合せて苦く笑せうした。こ、その途端えんぜんじに偃えん禪師は輕い笑みをうかべて、

「日々是れ好日。」こ自答して、さうしてふつつ眼をつぶつて了まはれた。その臉まがたのあたりに、前世後世億萬人の姿すがたをうかべた慈悲光をたよはせながら……。

六 四空定の證得過程

四空の定境は、四禪の定境が有から無へ轉ずる修行境であつたやうに、無から空へ轉ずる修行境になるのである。さうして、この境地が、欲・色の二界を超え

た無色の世界であり、方處を絶した如幻の世界になるのである。

だから、「無色界定」むしきかいぢやうといふは、眼に見える物の世界に眼に見えぬ力の世界に不二一如の相を如是の法相うがたとして完全に明らめる爲めに修する三昧のこころであるといひ、また、「無色界」むしきかいといふは、物の形をそなへたものは一つも無いといふ世界、即ち識心のみの禪定に住する深妙な世界であるとい説かれて居るのである。欲・色・無色の三界に互つて其のごちらへも片寄らないやうな如法の活らきを身心一如の活らきとして證得する修行境であるとい説かれて居るのである。

斯う説かれる言葉を其のまゝうけければ、無色界といふは、概念の世界をか觀念の世界にかいふ現實はなれのした抽象の世界に想はれ易いが、事實は、決してさうした片寄りの世界ではなく、色であると同時に空であり、空であると同時に色であるといふ、色空二相の不二一如の機契きけいといふものが、定中に於ける三昧相

から、動かぬ絶對の事實として自然に證得される世界なのである。考へられた世界でも、想はれた世界でもなく、戒・定・慧の三學の修行が進むにつれて、自然に開顯されて來る世界である。生命の玄妙裡に潜められた、本有の世界であり、内在の世界である。だから、理解する世界では無く、經驗する世界、證得する世界であるとい説かれて居るのである。

事實、其の境地に達すれば、自然にさう見られも感じられもするやうになる實在界ではあるが、さて、そこまで達する修行者といふものが案外少ない爲め、つい、説話される世界、記述される世界として、目や耳やを通じて傳へられるやうな世界にされて了つたのである。實證されねばならぬ世界が、學解で濟む世界にされて了つたのである。大きな過誤である。

禪定の世界は、哲學の世界では無い。思索によつて到達される世界では無い。

にも拘らず、何時かそれが哲學的に整理されて、「無色界むしきくわいといふは、何うしたら絶對に片寄りの無い認識にんしきが有てるやうになるかこいふこころを思惟しゆいの上に明らめる方法を修得する爲めの三昧境である」こか、「無色界定むしきくわいといふは、一般的な思惟のはたらきこいふものが、過去の生活を反省はんせいするだけに止まつて居ればいゝのに、現在の生活をも直接決定したり方向づけたりする撰定力にもなつて居るから、其の爲めに心そのもの、本有能力ほんのりきいふものが阻碍そがいされて、何んこしても完全に發揮はつきされぬやうになつて居るから、其の過誤を矯正きやうせいする爲めに修習しゆじふされる三昧である」こいふやうに單に思索の爲め認識の爲めの方法ことして扱はれるやうなこになつて了つたのである。だが、これは、天然絹糸に對する人造絹糸のやうなもので、洵まことにつまらぬ擬まねひこである。尤も、人絹が本絹のまがひものこして使はれる過渡期を経て獨立した特色が認められるやうになるだらうこ想像されるやう

に、禪定の哲學的解釋が何時かはまた獨立した東洋哲學こして西洋哲學の上に大成されるだらうから、其の意味に於て、先づ慶賀の詞を貽のこしておくこにする。けれども、繰り返して言ひたいこは、禪定は思索の爲めの修行ではなく、身心一如の活らきが自然に宇宙的な正しさを有つて日常生活の上に顯現けんげんするやうになる爲めの修行であるこいふこころである。兎かく我がに著ちやくしたがる身心の活らきを宇宙的な無著境むしやくきやうまで淨化しおほせる爲めの修行であるこいふこころである。何んこして我執がしやくや偏見へんけんやが有てないこ同時に、打てば響くこいふ方便力を有つて、自在にしてまた明朗な生活境をひらく爲めにする修行であるこいふこころである。

さて、四空定しくうぢやうであるが、この定は、「何うしたら身心二相の活らきを空くうじて一如のものにするこが出来るか」こいふ思索的な態度で入るべき定では無く、ただ信心の眞心まごころひこつをこめた即身成佛そくしんじやうぶつの行願ぎやうがんを以て坐定ざぢやうして居さへすれば、夫

れで自然にひらけて来る定である。

だから斯うした願心を持つて坐定すれば、聽て、四禪定に於て鏡に物が映るやうに、色界のすがたを在るがま、に見たり感じたりして著さぬこいふ修行を成じたる其の功德によつて、忽然と無方處の世界へ抜けずには居られない氣魄の動きを感ずるやうになるのである。さうして、たゞ茫乎とした感じの中へすほつこ抜け出すのである。こゝが、第一の「空無邊處定」の定境である。即ち今までの、色界定こいふ形を對照した世界から、忽然と、形なく對照なき無色界へ進出するのである。今までの、外に向けて來た心眼を内に向けて、無方處に處する心の据ゑごころを、一切が空じられて最後にたゞ一つ残される心所のうちから見出すこいふ審細な行處に入るのである。こゝは形なく對照なき世界だこ一般的にはいへるが、實はまだ有・無・空の中の無の世界であるが故に、見えぬ力である心所

が、有の世界の影をた、へて残存して居るのである。即ち、たゞ茫乎とした世界ではあるが、さて、何處かに残存する自己こいふものが微かに感じられる境地である。従つて、この境地ではまだ超えて來た色界の影が、例へば、風に流れる薄雲のやうにはのこながらに見えかくれするのである。が、これは、例へば暎のうちに残る影のやうなもので、定力が澄むにつれて自然に跟なく消え失せて了ふのである。さうして、一切の色相が完全に空じられたと觀する心所相のみがたゞひこつ微かな色相をこいふめて氣づかれぬ最後のものこして残るのである。だから、この境地を説いて、「無色界の第一天である。形色の相を厭うて無邊の空を思ひ、こかくして、空無邊の知解を作して生ずる處であるが故に空無邊處こいふ。尙ほ、無色界は方處なき世界ではあるが、勝縁の果報によつて生ずる世界であるが故に、姑く四の差別處の名を付しておく」こいはれて居るのである。が、新しい學者の

説くところによれば、「この定は、禪定による完全な思惟を以て事物の空相を如實に理解する定であるが故に、一切の事物は常に變化して決して一定の自性を有たないものであることを如實に理解する、即ち、變化するものを變化するものとして完全に把握するところの思惟を完成する爲めの定境である。」といふことになのである。味はふべきところである。身心を以て實相の上に知解したところを、心のみによつて解釋したところでは斯う違ふのである。勿論、廣義に解釋すれば誤りだといへないが、迫力の無いところが殘念である。結局、見た話し聞いた話との相違である。

さて、この定中に於ける實相であるが、この定に入つてはじめて、形なき力の活らき方といふものが如實に觀得されるのである。即ち、無の世界に於ける變化常無き無限多の氣の活らきといふものに依つて、有の世界に於ける一切の形象に

いふものが、例へば、操つり人形のやうに自在に操つられて居るすがたが如實に觀じられるのである。夫れが、しかも、自己の身うちに於ける變化の實相として經驗されるのである。だから、この實相を觀ずる心眼が、自然に操つられる有相からはなれて操つる無相の方へ轉ずるのである。より根本的な活らきの方へ自然に索かれて行くのである。

有相の影から離れきるといふのは、斯うした過程をこるのである。だから、このすがたを觀じたまゝに表現すれば、「過ぎ超えて來た色界の影が、例へば風に流れる薄雲のやうにほのかに見えかくれして、聽て跟なく消え失せて行くのである。」といふことになるのである。これが自然に有相が空じられる實相である。有相が空じられて無相が如實に顯現する實相である。さうして、最後に殘るたゞひみつひみつの微かな色相を湛へた心所の上へ、無相裡に於ける一切の力が集注される

のである。「多にして一、一にして多」である無の世界に於ける力の妙融相が、まざまざと觀じられる事實として集注するのである。こゝが、無の世界である。だから、この無相裡に於ては、依るべき方處が無いと同時に、方處に依らうとする何物も無いといふ状態が現するのである。だが、こゝにひきつ、形なき一切の力が集注・歸一された識心といふものが一つ、微かな有相をたへた依所として残されて居るのである。そこで、この最後の依所から解脱せぬ限り、完全に有相を空じたここにはならぬといふ滞ほりが残るここになるのである。が、實は、この滞ほりが微妙な機契となつて、第二天の「識無邊處定」がひらけて來るここになつて居るのである。

身についた餘習が、最後に残る有相の影として心に染みついて居るから、夫れで、何んとして無方處に處する識心が澄みきららない、澄みきららないから眞の落ち著きが有てないといふことになるのである。だからして、この落ち著けぬ氣が、一と足おくれた身の餘習、即ち微かに湛へられた有相の影に向つて迫つて行くのである。意識を超えた自然の力として迫つて行くのである。自然癒能力が、意識を超えた力として病患部へ迫つて行くやうにである。

さうである、斯うした過程をこつて次第に迫つて行くのである。さうするに、それまで殆んど識心の上から忘じ去られたやうになつて居た身相の存在が、例へば深い霧の中に微めく物影のやうに感じられて、其の何處も知れぬ邊りに微かな痛苦が起きて來るのである。さうして、聽て其の痛苦の爲めに、今までたゞ遙かなものにおもへて居た全身が、重苦しい鈍痛に封じられて、臞ろげながらに間近く感じられて來るのである。こゝ、其の時は、つと胸に轟きを傳へて、廣々とした感じが全身に擴がるのである。この身がこのまゝ、大宇宙に化したといふやうな、

たゞ廣々とした廣漠感にひたされるのである。身についての餘習が開破されたのである。

斯うして自己の上に宇宙の廣大さが感じられるといふ境地、これが、「空無邊處定」が完全に成ぜられたところであると同時に、「識無邊處定」が開けたところになるのである。

さうするに、今までの、自己と宇宙といふやうな相對的な差別感といふものが全く無くなつて、たゞ廣々とした世界の中に、悠々然と心を伸べて、天地と共に呼吸するといふ廣濶感が味はへるこゝになるのである。こゝに、何んの方處、何んの滞りがあらう、悠々たるものである。さうして、この悠々たる廣さの中に、一切の有相を操つる無相の力が、形なき氣の動きとして如實に觀じられるのである。氣の動きが縁にしたがつて集散しつゝ、或は有の氣を凝り、或は空の氣を散

じて行くすがたが如實に觀じられるのである。

こゝが、三世に互る縁起の實相が如實に觀じられる處である。だから、「十二縁起」の法といふものは、この境地からでなければ決して明らかめられるものではないのである。事實、この境地に於て、識心の上へびたり、印象された縁起觀でなければ、生きた法として説かれ得るものではないのである。生きた法として説かれない限り、生きた生活の役には立たないのである。

斯うした如法の實相を、宇宙化された識心に觀じて居るに、聽て、その集散する氣の動きが、更に根本的な力によつて操つられて居るこゝが觀じられて、其の方へ識心を索かれるのである。いや、自然に其の方へ索かれて行くのである。さうするに、聽て其の識心の上へ、生物創成の根本相である陰陽兩氣相尅の順萬字相が忽然と顯現するのである。さうして、其の順萬字の一相によつて、無限多の無相

の氣が何に滞りなく操つられて居る實相が觀じられるのである。宇宙化された廣潤な識心の中で、この實相が悠々々觀じられるのである。が、聽てまた、さうした識心の上へ、陰陽相剋の順萬字相の荒じさが迫つて來るのである。さうして、何んさしても落ち著けぬ氣に封じつくされて了ふのである。最後に残された一つの依所としての識心がたゞ重苦しくござされて了ふのである。開破の氣が迫つたのである。さうして、迫りきつたところでは、つゞ開けるのである。ござ、れた識心が、瞬間ば、つゞ開破されるのである。これで、最後に残された依所としての識心が空じられたのである。

こゝが、「識無邊處定」が成じたところであり、また、「無所有處定」が開顯したところであるといふことになるのである。

だから、此の境地を説いて、「前地に於ける外面的な空無邊の境を厭うて、其の虚空觀を捨離し、新たに、内面的な識心を縁じて、三世の識心一如空の解を作すが故に「識無邊處」名づくる」といはれて居るのである。外へ索かれて居た心眼の習氣が、こゝで完全に捨離されると同時に、内的にも空じられるといふ實相顯現の境地である。にも拘らず、新しい學説の方では、「萬般の事物を認識するに當つて、如何に細心の注意をはらつても、その認識するところが常に一面觀に墮して居る」といふことは何故であるか、何故に真相が把握されぬかといふ、その偏見の原因を明らかにする爲めの三昧が「識無邊處定」である」といふて居るのである。面白い言葉である。禪定を思索の形式にしたのである。信心成道の修行方法を、哲學的な思索形式に流用したのである。

が、夫れはさておいて、最後に残る識心所が忽然空じられた時、即ち「識無邊處定」が成じられた時、其の時が即ち「得入」の入所を得た時になるのである。

「得道」の勝縁しょうえんに會つた時になるのである。だから、「汝まち得たり」といふ境地はここでなければならぬのである。こゝまで來なければ、坐禪儀の「人身の機用を得たり」といふこゝは出來ないのである。當まさに快適の境地である。即ち、自己が宇宙の廣さくわんに完全に融合し得る入所を得たからである。方處を絶したくわんこゝろに悠ゆう自適じこくし得る妙機を得たからである。

斯うした境地を得たこゝろへ開けて來るのが、無・空二相の中間に位する「無所有處定」なのである。この定に於て、はじめ、觀ずる識心所しきしんに觀じられる諸相しよさうの相對關係が空じつくされるのである。

諸相を觀ずる最後の依所いしよとして識心が空じられてはじめてこの定境が開けたのだから、當然こゝには一點識心の影をも留めない筈なのに、なほ、それもなく感じられて來る夫れは微かな一つの依所が感じられて、そこへ、宇宙創成の劫初くわんじよの

氣である陰陽兩氣相剋の逆萬字相が觀じられて來るのである。尤も、この一つの依所いしよといふ感じは、何處どこといふ中心を有たない洵に朧な感じに外ならないのだから、宇宙化された自己の當體全體が一つの依所いしよとなつて、そこへ宇宙劫初の逆萬字相が觀じられて來るのだといふこゝになるのである。夫れは、何んなんにしても捕へとらへところのない實相である。が、この捕へ難き感じに於て觀じられる陰陽兩氣の活相かっさうといふものによつて、甫はめて空の世界から無の世界が生れて來る實相が如々に觀じられるのである。

寂爾じやくにとした空の氣の中へふつふつつ陽の氣が立つて來るこゝ、そこへ忽ち陰の氣がからまつて來るこゝいふ、こゝの忽然縁起こつぜんえんぎの如相ごとといふものが、これが即ち「法性縁起」の實相になるのである。空の氣から無の氣が生れて來るこゝいふ、こゝの過程が、これが眞如の實相しんじよとしての法性が縁起するすがたなのである。だから、宇宙間の

一切の物象は等しく法性を有するに同時に法性によつて生滅するものであるといふところが無理なく領けるのである。即ち生死一如・身心一如の實相が、こゝで事實として證入されることになるのである。こゝが、「汝ち證せり」の入所になるのである。だから、坐禪箴の「其の成自から證す」の證は、こゝまで來たものでなければ領けないことになるのである。

この證入の入所を觀するに、こゝで、瞬間妙に息づまるやうな迫つた感じにひたされるのである。即ち、不相互の感じである。さうして、ふつとその不相互の感じの外へ投げ出されるのである。夫れが恰ぎ、大氣の中へふつと吐かれた氣息のやうにある。だから、投げ出されたと思ふ次の瞬間には、最うふうはりとした氣の世界に融合同化されて、微塵も眼をこぼめなくなるのである。即ち、こゝで、完全に、自己の身心相の影を留めた、微かな依所の氣即ち我執の習氣そのも

のから解脱し了るのである。事實、我執の氣といふものはこゝまでついて來るのである。が、こゝで、完全にこの習氣が空じられて、空の一如相に融合し了る、即ち相互し了るのである。

こゝが、「無所有處定」が成じたところであると同時に、「非想非々想定」が開顯したところになるのである。

だから、この境地を説いて、「前地に於ける識無邊の境を厭うて、識心の所縁にもに所有なしを觀じて、心無所有の知解を作すが故に「無所有處定」を名づけるのである」といはれて居るのである。が、これが、新しい學者の説になるに、「事物に對して加へたあらゆる方面からの觀察を、如何に綜合し組織づくべきであるかといふことを明らかにする爲めに入る三昧境が即ち「無所有處定」である」といふことになるのである。成るはぎ、良く置き換へたものだを微笑まれる言葉である。

さて、終りの「非想非々想定」であるが、この定は、宇宙の廣さが自己の上に感じられたまゝいふところから進展して終に自己が空の世界に融合し了るに至つた、その宇宙即我・我即宇宙の妙解、即ち色即是空の妙融力を身心一如の活らきまじして證入するその入所を得る爲めの修行境である。さうして、この境地は、法性としての宇宙の氣の凝りが縁起して來る「種」の世界であるが故に、無から有へ轉じて行く空の妙融相が如實に觀じられる境地である。人類未生前の父母の面目まゝいふ、この想ひ遙かな幽玄境が如實に觀じられる境地である。こゝまで來れば「闇の夜に鳴かぬ鳥の聲きけば生れぬ先の父ぞ戀しき」まゝいふ道歌の妙味が如々の事實まじして味得できるのである。だが、學者の新説では、「人間の生活を最も純正なものにするには、其の日々の一擧手一投足に非想非々想、即ち無念無想の自然さを有たせなければならぬこゝを自覺して、さうして其の自覺を思惟そのもの

の本質の上に明らめるまゝいふのが、この「非想非々想定」の三昧境である」まゝされて居るのである。

こゝは、寂境である。宇宙萬象一切の氣を種の一元に歸寂させた幽玄の世界である。正法眼藏の「含藏」境である。「胎藏」の世界である。だから、この定境を説いて、「前の識處は有想であり、無所有處は無想であつたが、こゝに至つて前の有想を捨離するが故に非想まゝいひ、無想を捨離するが故に非々想まゝいふのである。修行者はこゝに於て痴の如く醉の如く眠の如く暗の如くであつて、此の愛樂すべきなく、泯然・寂絶・清淨・無爲である。故に非想非々想定を名づける」まゝいふのである。當に「曰ひ難し」の世界である。例へば、劍聖がびたり青眼に構へたその一如相の如き境地である。だから、「いふにいはれずまゝにこかれず」の妙境だまゝいはれて居るのである。事實、宇宙を自己まゝも自己を宇宙まゝも感

ずる依所よしよもなければ、身心一如の妙融相を觀する妙活の氣もないこいふ境地になるのである。

だが、この寂境にひたりきるこ、例へば眠り足つてふつこ眼ざめるこいふやうな明朗な淨氣にうたれては、つこ轉ずる勝縁が得られるのである。一切を捨離した解脫げだつの輕快さが忽然こ觀じられて來るのである。無差別平等の清淨感が、例へば雲をひらいて現する月光のやうに觀じられて來るのである。即ち、眞空しんくう清淨しやうじやうの佛界の氣がふつこ通つて來るのである。正覺しやうかく成道じやうだうの勝縁が身心一如の行願ぎやうくわんの上に熟して忽然こ現するこになつたのである。宇宙的な「藏種ざうしゆ」を超えたこころから、甫はじめて身心一如の妙融力が現じて來るこいふ、其の妙解の入所が開顯かいけんしたのである。即ち、眞空の氣を受けねば、「解げ」に「活くわつ」の氣かよが通はぬものであるこいふ妙機が、こ、ではじめて如々の事實じじつとして觀じられる事になるのである。即

ち、佛天の加護による信心の功德が實證されるこになるのである。

こ、が、「非想非々想定」の成じたこころであり、即身成佛の入所を得たこころになるのである。

これで、四空定えんじやうが圓成えんじやうしたこになるのであるが、この四空の定境は、心に一歩後れて従ふ身が空じつくされる修行境であるが故に、何うしても「生死のほごは御因縁まかせ佛様の思召次第」こいふ、身命を投げ出してかゝる信心の氣が据わつて居なければ成じやうぜられぬ定である。眞劍に佛天の加護が信じられて勇往ゆうわうせずには居られない求道ぐだう心が燃え立たない限り決して修しゆ了りやうする行持ぎやうぢでは無いのである。心を以て生死を超えるこいふ事は易やすいが、身を以て生死を超えるこいふ事は難い。心を以て巡禮修行の難關を味はふ事は易いが、身を以てする事は難い。ここである。「御佛にこの身を供養し奉る」こいふ清淨無垢の心願が發起せぬ限り、

決してこの定は修し得らるべくも無いのである。だが、凡百の佛道修行者が、「河豚は食ひたし命は惜し、」の似而非信心で行くから、この定境どころか、佛教までが似而非佛教に化されて、空しく巷間に卑しまれて居るのである。

然しながら、何う歪められても歪みきらないところに佛教の偉大さがある。あるからこそ、清濁に互る無邊の信者が時代を貫ぬいて悠々々率られて行くのである。だから、「佛教の信心は、常に凡百褒貶の上に樹つべきである」（いはいはれ、また、「妄りに學解にはしるべからず」といはれて居るのである。さうして、「萬行のうち、最勝の實行は、たゞ坐禪の一門のみ」（こ、實證・實悟の道が示されて居るのである。勇往し邁進すべきである。佛天の加護を信じて清淨無垢の願心を行すべきである。行ずれば、「寶藏自から開けて受用如意ならん」である。

だが、「空を空するが故に空なり」は悟後の修行である。

こ、いふ「空を空する」（こは、即ち、戒・定・慧の三學を身心一如の活らきこして、日常生活裡に完全に生かし出すこゝである。悟りが悟りくさくないやうになつて、然かも妙融自在の方便力が、打てば響くやうに活らき出すこゝである。欲・色・無色の三界に通達して、然かもごちらへも片寄らずに、例へば大空に輝やまわたる太陽のやうに明朗々の中道が保てるやうになるこゝである。竟り、修行に即身成佛の磨きをかけて、「歸り來つて別事なし」といふ、凡聖不二の本有佛性を開顯して、さうして、日々の言行が其のま、萬人和合の佛法にかなふやうになるこゝいふこゝである。蛇足々々。

七 行願の圓成境

四禪定によつて心の色相を空じ、四空定によつて身の色相を空じ了るこゝ、そこ

へ、忽然として滅盡めつじんの定境が開けて来る。夫れは例へば梅雨を拂つた月明のやうに、明朝々かひげんに開顯して來るのである。

だが、この定境はまだ、梅雨があけた許りのやうなもので据わりがついて居ないから、兎かく其の明朗さに貪著したがる習氣じっけが浮いて來て、漸く開顯したばかりの定相を曇らす懼おそれがあるのである。

だから、この滅盡定が、四禪定の後へ來る無想定と對照される二無心定として、成道の願心弱く、其の定境に貪著すれば外道へ墮出し、不退の願心強く、貪著の習氣を拂了し得れば内道へ悟入する、内外二道の岐路に當る難定だこされて居るのである。

事實、外道者流は、たゞ一途に自己の安穩あんゑん・怡樂いらくを希求して、一日も早く身心の苦惱を遠離したいこいふので修行するのだから、さうした安逸あんゐが貪ねまぼれる無想。

滅盡等の定境が開けたこなれば、忽ちそこに安心の腰を据ゑて、決して夫れ以上に出ようこはしないのである。夫れは、勿論、身心解脱の行願を成じて、自他一如の和合相を妙融自在に活かこせたいこいふ、信行具足しんぎょうぐそくの心願による修行ではないのだから、無苦・有樂の定境が開けたこなれば、當然そこに留まつて生きながらの骸むくろ成こるこを無上の樂相ことするのである。

だが、内道者流が、途中で願心を失つて、不覺な外道へ墮出する懼れがあるから困るのである。だから、常に著する勿れこ戒めて居る内道修行に於ては、殊に著し易いこの二無心定を難定ことして嚴戒するこになつて居るのである。

尤も、同じ二無心定でも、滅盡定は無想定より遙かに定境が進んで居るから、内道の修行者が、時に、最後の習氣に囚はれて貪著するやうな事があつても、何れは、其の習氣を滅盡せずには居られない信心の氣魄に動かされて、凡そはまた

精進を續けて行くやうになり得るから、この定もまた、前の無想定と同じ中間定であるといふことになつて居るのである。だから、修定の道は、即身成佛の心願を以てすれば内道となり、安穩・怡樂の貪心を以てすれば外道となるといはれて居るのである。

このやうに、不覺の著心に囚はれると、佛道は忽ち邪道に變ずるを常とするから、よし滅盡定まで修行しぬけたからといつても安心は出來ないのである。安心すれば墮地獄である。だから、佛道の修行は、常に佛光を通身に感ずる不退の信心によらねば圓成されぬものであるといはれて居るのである。

滅盡定に於ては、殊にこの信心が大切である。こいふのは、こゝまで來ると、身心ともに空の寂相をこつて、如何にも佛菩薩に無等々に成つたやうに感じられ易いから、夫れでつい著の習氣に犯されて慢心するからである。佛菩薩の御加護

によつてこゝまで進ませて戴いたのだと感謝する敬虔な信心が、こゝでふつと緩む恐れがあるからである。

だから、この定境では、寧ろ、信心の行願に最後の磨きをかけるこゝが主とされねばならぬのである。でなければ、四禪・四空の修定の依所となつて來た身心の習氣が滅し盡されるこゝにはならないのである。

そこでこの定は、先づ通身に佛光を感ずる信心を以て不退の願心を潜めねばならぬのである。さうすれば、其の功德力によつて、完全に著の習氣が拂拭されると同時に、其の身が其のまま、廣大無邊の空界に融合されて、身心一如空の寂相をこゝこゝになるのである。即ち、こゝで、身心の活らきが完全に休止して、生死一如の異相をこゝから、そこが、其のまま、空虚・恒常の無佛世に化し了るこゝになるのである。だから、外道はこの定境の安穩・怡樂な恒常相に著して、そこへ

ぎつか、安心の腰を据ゑて了ふのである。独自の安逸を望む外道にまつては、そこが唯一の苦の解脱境になるのだから、そこへ安心の腰を据ゑた以上、決して動けぬが當然だといふことになるのである。

だが、この空虚・恒常の無佛世といふものは、例へば白痴の世界のやうなもので、たゞほかんごしたま、絶對に變化の無い世界に外ならないのだから、内道佛法の無常の大法を、身心一如の妙融力として生かしたい心願を以て、不退の精進を續けて來た修行者になれば、一度は當然の過程としてそこに入つても、決して、さう長くは留まれないことになるのである。即ち、萬人和合の爲めの佛道が、獨自安逸の袋小路へ入つたやうなものだから、一度は其の安逸さにひたされても、さて、そこに、安心の腰は据ゑられないといふことになるのである。が、然し、この境地ほご、身心一如空の大安息が得られる境地はないので、悟後の聖者が、

よくこの定に入つて、聖胎を長養するここがあるのである。

だから、「滅盡定」といふは、滅盡三昧とも、滅受想定ともいはれる二無心定の一つであつて、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識の心心所を滅盡して起らしめぬ禪定であると同時に、欲・色・無色の三界の惑を斷じ盡して退還せぬ果位を證得した不還果の聖者が、假に涅槃に入る想を爲して入る禪定である」と説かれて居るのである。

このやうに、この定境といふものは、身心の上に残る最後の習氣を斷じ盡して身心一如空の寂相を成ずる定であると同時に、その空寂の淨相に著すれば外道定となり、妙用すれば安息定となるといふ中間定であるといふことになるのである。だから、この定中では、先づ、身心一如の空相を、清淨無垢の鏡のやうに、一點の穢れも歪みも缺けぬものに澄ましぬいて、さうして、そこへ映つて

來る一切の色相といふものを、欲・色・無色の三界に互る無常相として如實に觀じ盡すと同時に、一度それが消え去れば、最早やそこには一點の著相をも留めないといふ智鏡を圓成せねばならぬのである。さうして、其の智鏡が圓成したころが、即ち真空清淨の空界が自己の上に圓融して、色即是空の妙相が顯現したころになるのである。

けれども、こゝではまだ、色即是空の妙相が現じたといふだけで、其の妙相が直ちに妙覺一轉の機契となつて、方便自在の妙融力を現する機微だといふこゝは悟れないのである。だから、こゝがほんの最う一息といふこゝろになるのだが、さて、難かしいのである。佛法の眞理へ眞つ正面から突き當つたこゝろである。急所である。

こゝまで來れば、最う言ふこゝには無い。だが、これだけは言へる。信心の願力によつて、身心の色相がごんな風に變遷して空相をみるかといふ、この變遷のあこを、順・逆萬字圓融の妙機として妙解さへすれば、夫れで、何んの苦もなく悟れる。こゝである。これが、色即是空の妙機である。「人々自得」、花でよし、鳥でよし、因縁さへ熟せば何んでも悟れる。聖諦妙解の腑、「心眼瞬一瞬、明暗去來」夫れ其處に」の妙所である。

そして、覺了すれば悠悠々自適、當に「廓然無聖」である。

斯うした機微に徹して、聽て妙覺一轉したこゝろが、即ち、「真空清淨なる處、眞に清淨なり」の金剛定になるのである。

「金剛定といふは、金剛三昧も、金剛喻定もいはれる最後定であつて、聲聞・緣覺・菩薩の三乘に互る信行最後の煩惱を斷盡して、佛菩薩も無等々の果位を得て、身心一如の妙融自在力を圓成する至極の禪定である」こ説かれて居る通

り、信心を修行がこゝで圓融されて、妙用不盡の金剛心が圓成される定境になるのである。

この定境は、滅盡定から妙覺一轉して真空清淨になりきつて開けた定境に外ならないのだから、そこには一點煩惱の曇りなきある筈は無いのだが、さて、實際にぶつかつて見るに、真空になりきつたといふその空相に著する一抹の著氣、即ち、「信行最後の煩惱」といふものが、またそこへふうつゝ薄雲のやうにかゝつて來るのである。夫れは、例へば、潔癖の人が潔に著するといふやうに、真空に成り得た清淨さが、其のまゝ穢濁セチヤクの煩惱もなつて活らくといふ、清濁一如の妙機が得られて居ないから、夫れで、つい空に著するといふこゝになるのである。即ち、無常でなければならぬ空が、何んとしても恒常の空のやうに思はれるといふ煩惱が、ふうつゝそこへ涌いて來るこゝになるのである。これが、空によつて生

ずる「空病」としての煩惱である。

だから、この煩惱は、空に對する著が空じられて、妙覺一轉の悟りが更に一轉して色即是空の妙融力に成りさへすれば、夫れで煩惱即菩提の妙機が證得されるといふ、本覺の機契に外ならないといふこゝになるのである。即ち、大悟徹底の爲めに病まれる異相であるといふこゝになるのである。

斯うした過程を経て、この定境が金剛不壞の佛法界となるのだから、單に悟つたといふだけでは、佛法が凡聖一如の妙法として即身成佛の身についたといふ譯には行かないのである。さうして、夫れがまた日常生活の上に自他一如の和合力を現しなければ、佛法の悟りが人天利益の役にたつものにはならないのである。

そこで、真空無量の大悟徹底境を開く、この定境の妙機・妙相であるが、斯うした微妙な機微といふものは、自から言證の彼方に於て自證・自得される筈のも

のであるから、こゝでは、定境圓成の妙相だけ述べておくこゝにする。

信行具足し了れば、真空清淨の氣が自から圓相を描いて其の身を光被する。當に、身心一如・清淨無垢の極み、絶大無限・無始無終無一法の圓空相成就である。即ち、無一法・無盡藏にして金剛不壞なる佛法界開顯である。これが、實相常住無生の靈源たる眞如の本體に圓融された如是相である。即身成佛の相である。大悟徹底の相である。

だから、こゝまで來れば、無盡藏にして無一法の寂相をこつて居ながら、縁に従つて萬法を出す真空妙有の宇宙本體が、其のまゝ、其の身に圓融して無碍の自在力が活現するこゝになるのである。従つて、これからは、平常心是道の那^な一^{いつ}寶^{ぼう}を日常生活裡に生かして、受用不盡・自利利他の自在力を融通無碍に活^よらかせて行くこゝが出来るやうになる譯なのである。

こゝが、身心淨化の法門である禪定修行の功德によつて圓成される、凡聖一如・如意滿足の法悅境であり、大聖釋尊が、最尊極妙の身を以て顯示された、人生最大の禪福境である。故に、「世尊この土に於て成佛します。當土即ち蓮華國」を喝破されて居るのである。

第五章 眞空妙有の如是相

一 喝

其の心・理事無礙、其の行・觀達自在。

眞の幸福者は、三界無安の火宅に坐して動ぜず。

一朶の白蓮、火裏に紅なり。

喝。

信心と坐禪終

昭和十年二月十日印刷
昭和十年二月十五日發行

信心と坐禪

定價 一圓五十錢

著者 油井眞砂

發行者 油井兄弟

東京市澁谷區代々木初臺四八二

印刷所 小林又七印刷所

東京市澁谷區永田町一ノ四

印刷者 小林又七

東京市澁谷區永田町一ノ四

分 身 叢 書
第一編

不 發
許 製

發行所

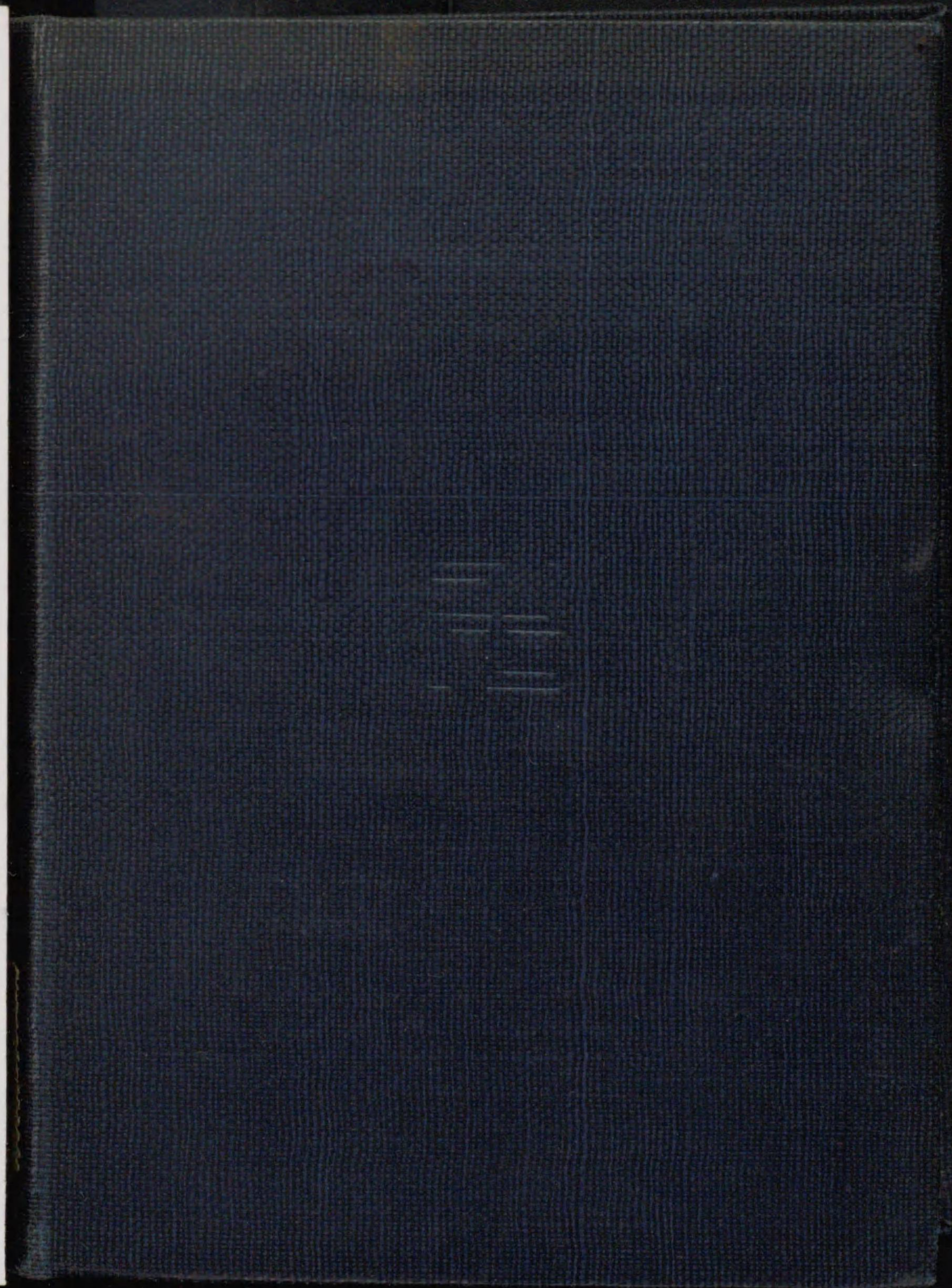
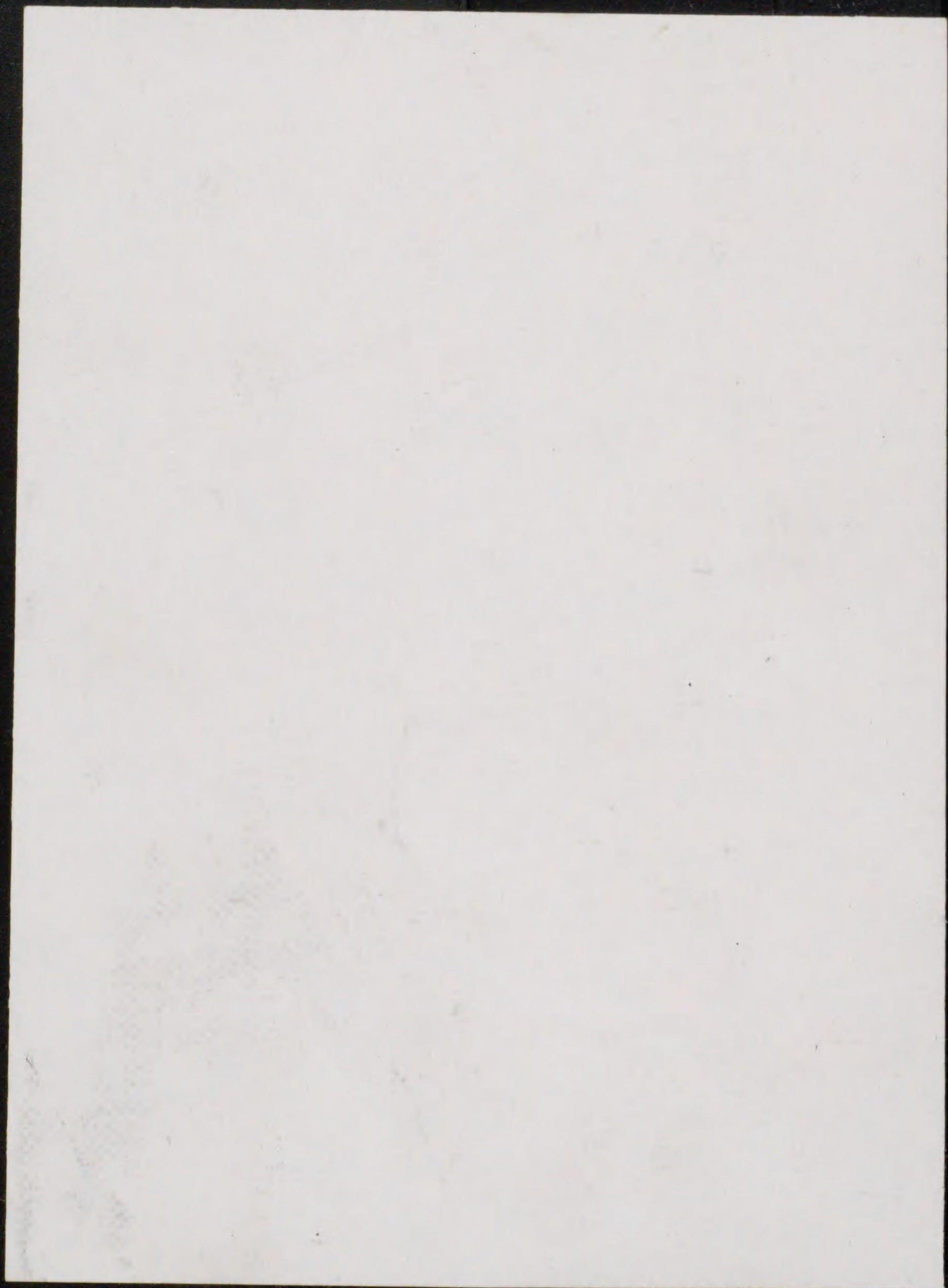
東京市澁谷區代々木初臺四八二

分 身 會

647
135



647
135

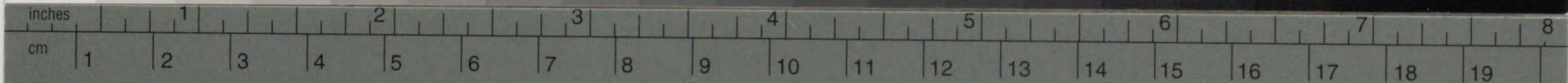


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

